

——庶民の体験を綴る——



つむぐ

立川・女の暮らし聞き書きの会

はじめに

公民館の女性史講座「昭和に生きた母や祖母たちの歴史に学ぶ」を受講した事がきっかけで生れた「立川女の暮らし書き書きの会」も一九八三年三月の結成以来5年の年月がたちました。その間、「会報誌」つむぐの発行や、学習会を重ねるうち、からまつた糸がときほぐされていくように少しずつ、女たちのおかれている状況や、あるいはきた道すじが見えるようになってきました。

明治二十二年、もともと純農村地帯であった立川に、いち早く、鉄道が通り、大正十一年には陸軍航空第五大隊が移設されました。そのことは、立川が、周辺地域とは全く異なった近現代史を歩まさるを得なかつた事を意味しています。

”つむぐ”1号から5号までは、大正・昭和という激しく揺れ動く時代を先輩の女たちが、立川の地でどう生き、どう暮らしを作ってきたのか、主に聞き書きと言う方法によつて、個人史を追い求めた活動をしてきました。6号以降は更に個々の歴史を大きな歴史の流れとの関連でとらえ直し、これから歴史を作る私たちが、過去の歴史や先輩の女たちの生き方から何を学び何を受継ぐのか。そこから、未来を切開く方向を探つて行きたいと思います。

目

次

はじめ

立川市全図

4 1

砂川・女の暮らし

砂川の開発とキリスト教

6 5

砂川のキリスト教Ⅱ

川久保 ミチエ 7

— 激動の時代を生きて —

砂川・ある昭和史断章

聞き書き

下級兵士の二、二六事件

吉沢エミ 23

ある初年兵の回想より

前戦に勇士あれば

銃後に烈婦孝女あり

「満州國」の警察官として生きた日々

35 30 23 47

立川飛行場と女たち

立川飛行場

基地に追れて

— 中里の集団移転ノート —

原 和 美
49 48 47

砂川闘争と地域の女たち

63

砂川闘争

64

聞き書き

国境を越えて

竹内信子 65

座談会

79

—後記にかえて—

講演会

87

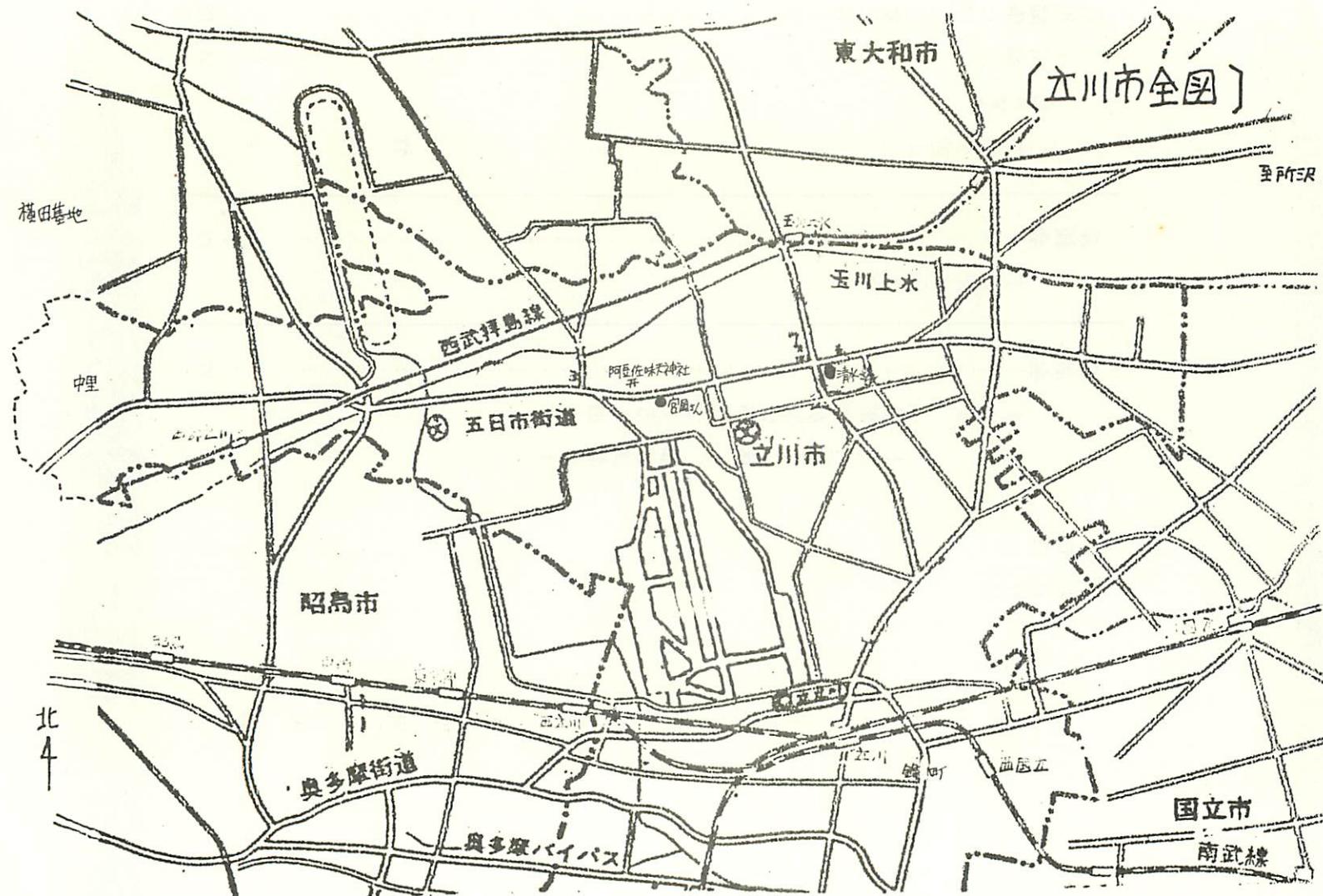
—いま、「満州」が問いかけてくるもの—

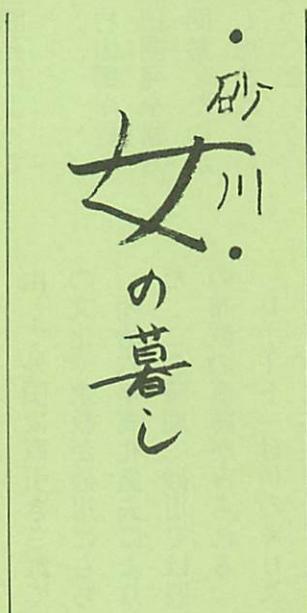
十二、三 林 郁 講演会より

年表

おわりに

表紙 矢ノ口 美穂





砂川の開発とキリスト教

五日市街道に沿つて東西に細長く伸び、うなぎの寝床ともいわれる砂川はもともと江戸幕府の直轄領であり、尾張徳川のお鷹場であつた。家々の裏手には短冊型に土地割された畠が整然と伸び、新田開発によつてできた村の面影を残している。

砂川の開発は慶長十四年（一六〇九）村山郷岸村（現武藏村山市）の村野氏が武藏野の新田開発を強力にすすめていた幕府の許可を得て原野を開墾したのが始まりといわれる。地味が悪く、水利にも恵まれない砂川の開発は多くの苦労を伴うものであったといふ。

承応二年（一六五三）江戸の飲み水を確保するため、羽村から江戸まで武藏野台地を貫流する玉川上水が開かれた。砂川にも次第に定住する人も増え、天文二年には正式に村となつた。

安政五年（一八五八）横浜港が開港し、西洋との交

易が始まつた。砂川でも養蚕や桑苗が盛んになり、特に桑苗は全国でも有数の産地として成長していく。

輸出の花形として生糸や織物の需要がたかまるにつれ、人々の暮らしも農業から半農、半商として身を立てる人も多くなり、村はいよいよ活況を呈していく。

砂川では生産された生糸や織物は八王子、横浜を経由して外国に取引きされていき、同時に横浜から西洋の文化や宗教が砂川にもちこまれるようになつた。

明治六年高札撤去によりキリスト教禁止令が解かれた。この時期、砂川では既にキリスト教（カトリック）の布教の痕跡がみられる。

レポート「砂川のキリスト教」「もう一つの絹の道」は砂川の地にもたらされたキリスト教がいつ、誰によつて、どのようなルートでもちこまれ、砂川の地に住む人々にどのような影響をあたえたのか、わずかな手がかりを求め、聞き歩き、そこで得た話や、資料にもとづいて推論したものである。

砂川のキリスト教 II

— 激動の時代を生きて —

一、女工・たけ乃

砂川の養蚕業は幕末から起つていて、明治期になるとしだいに村の中心産業になつてきた。

養蚕業と共に製糸業も起つて、明治十四年に器械製糸工場が作られた。

砂川の岡部製糸には約三十人の女工がいた。明治三十年頃、彼女たちの中で女工全体を指導する立場にいた三人の女工がいた。

この時、監督としていた島田角太郎は、後に共同製糸の経営にかかわるようになり、三人の女工もまた共同製糸で働くようになる。

二人は山梨、一人は横浜出身であった。

彼女らがどのような経過をたどり砂川へ来たのかははつ

きりわからないが、甲斐絹（めのつんだ絹の裏地）を砂川に売りによく来ていたといわれる商人のつてとも考えられる。

角太郎は、女工と砂川村の人たちとを結婚させるなど、女工たちの面倒をよくみていた。

三人も、砂川村の男と結婚し、砂川で生涯をとした。

横浜出身の一人は、こびきをしていた岩本姓となる。すぐ近くの島田家の貸家に住み、結婚後も島田家に時々遊びに来ていた。几帳面で、きれい好きな性格だったと言う。

山梨出身の一人は、神田姓となる。働き者だったという。山梨出身のもう一人が結婚した相手は、角太郎であった。女工の名はたけ乃。明治三十六年に結婚。この時、角太郎三十六歳、たけ乃二十三歳だった。

角太郎はカトリック信徒であった。

角太郎の父・薰は生糸の仕事に関わり、横浜へたびたび出かけており、キリスト教の思想に触れていた。明治八年、砂川で初めての信者となつた（この時、境弥兵衛、島田えい、榎本れいの三人が受洗。『つむぐ六号』参照）。

薰の妻・ギンの出身地は長崎とも埼玉ともいわれはつきりしないが、キリスト教徒となつていている。島田えいは、薰の

長女で、島根の松浦というところに嫁ぎ、家族もキリスト教徒となつた。長男の角太郎は神学校に通い十七、八歳頃洗礼を受けた。次男の定吉は鉄道関係の仕事をし福島県いわき市に、三男の従は東京に住み、末の妹アサは長崎へ嫁いだ。子供たちはそれぞれ住みついた土地で信仰を根づかせていった。

砂川では、境弥兵衛らの努力で信者は増えていった。

明治十八年、島田家の庭先に砂川聖トマス教会が建てられた。外国人宣教師など百人以上が出席し、式典は盛大に行われた。教会設立の中心人物は、角太郎始め生糸に関わる者が多かった。砂川のキリスト教は、生糸と結び付き、生糸の仕事をしている者たち、そして家族へと広まつていったと思われる。砂川では、一八七五（明治八）年から一八九〇（明治二十三）年までに、百一十七人が洗礼を受けた。

角太郎は信仰に情熱を注ぎ、明治二十年に宣教学校を開き、教師となり、宣教学校が廃止される二十三年まで砂川村の子弟に教えた。

幼い頃から角太郎は、西洋の新しい思想に触れ、キリスト教の自由平等の信念と、人道主義的な考えの中で育つて

いた。

カトリック信徒の中心的存在となつていった角太郎のキリスト的愛は、村人にも女工にも注がれる。

女工の中にキリスト教徒がいたのかどうか不明であるが、砂川二番を中心に百人以上信者がおり、女工が信者と結婚した場合もあつたようである。女工たちは、角太郎の存在と共に、キリスト教に対し好意的な考え方をもつていたように思える。

角太郎は、家柄の釣合う地元同士の結婚が普通だった当時の砂川で、妻に、女工のたけ乃を選んだ。

しつかりした性格のたけ乃是女工たちの中で中心的存在であり、それが角太郎にみそめられたきっかけとなつたのであろうか。カトリック信徒として、角太郎は身分にこだわらなかつたとも考えられる。

たけ乃の故郷は、山梨県櫛形町である。甲府からバスで平岡行きに乗り、四十分、終点で降りる。現在バス便は一日九便。櫛形山のなだらかな線をえがく中腹からふもとにかけて、たけ乃の育つた旧野々瀬村中野部落がある。小作人が多く、部落は貧しかつた。櫛形町は、県下で最も多く

二、デモクラシーの渦と角太郎

県外に女工を送り出した地域である。たけ乃の姉妹、近所の娘たちも皆、女工として県外に働きに出たことであろう。

砂川の製糸工場で働くようになつたたけ乃是、角太郎と知合い結婚する。

たけ乃是結婚後もなく女の子を産む。故郷の山梨から女中を連れてきて、実家へ仕送りもする。貧しい環境で育つたたけ乃にとって、この頃が、女として幸福の絶頂期であつたのではないだろうか。

たけ乃是、貧しい者も、金持ちも、『神の前には平等である』と説くキリスト教に入信する。しかし、いつ洗礼を受けたのかは不明である。角太郎からの影響が大きかつたと思えるが、共に信仰に生き、教会の活動をささえ、キリスト教徒として生き、また村長の妻としての役目をしっかりと果たしていった。

大正期、激しい政争の渦中に角太郎を送りだし、昭和に入り養蚕業が衰退に向かい、キリスト教から多くの信者が去っていく、激動の時代の中を、たけ乃是角太郎に寄り添うようにして生き、留守を守り、苦楽を共にした。たけ乃是、二十二年間連れ添つた角太郎にみとられて、五十五歳の一生を終えた。

島田角太郎は、明治四十一年村長に選ばれた。当時村長は推薦制で、組頭（今の自治会長）が集まり誰を推すかを決めていた。角太郎の属する政友会は、砂川村議会では少數与党であり、憲政会が優勢を保っていた。しかし角太郎は五期選ばれ、二十三年間村長を務めた。村長会会長を務めたこともあった。

大正時代は、閥族打倒、憲政擁護を旗印に、全国的に民衆運動がわきおこり、普通選挙を要求する声が高まつていた。

内閣は、政友会と憲政会で交互に担当した。多摩選出の代議士村野常右衛門、森久保作造、秋本喜七が、政友会に属して活躍し、人々の政治に対する関心は高かつた。

全国各地で激しい政争が起つたといわれ、北多摩郡役所のある府中町では、「車夫や女中に至るまで」二派に分れた。

砂川でも、政友会と憲政会とに分れ、村を二分した。政友会は島田角太郎が中心となり、砂川二番、八番（立

川市立第八小学校付近)での勢力が強かつた。

憲政会は砂川源五右衛門が中心となり、砂川三番での勢力が強かつた。

砂川では、国会議員、府議会議員選挙の立会い演説会がよく行われた。場所は小学校が主だった。大勢の時は教室の境の木の戸をはずし「教室、三教室を使うこともあり、百名以上集まつたこともあつた。少ない時は呼び集めてくることもあつた。通りで行われることもあつた。女性の姿は見られなかつた」という。

選挙は、村ぐるみ、家族ぐるみであつた。「憲政会の子供と遊んじやだめだ」「政友会の子と遊ぶな」と今まで仲のよかつたすぐ隣の子供同士が遊べず、いがみあいが続いた。村委会議員に立候補した家では、妻も、親戚や知人の家を回つて票集めをしたり、炊き出しをして手伝つた。

砂川村委会議員選挙も激戦であつた。大正六年、定員十八名で、当選は政友会では境幸介(キリスト教徒)ら七名、憲政会では砂川源五右衛門ら九名であつた(不明二名)。

当時、三多摩の政治家(三多摩壮士と呼ばれた)は「仕込み杖をふりまわしては、大酒を浴びる。政治論をぶつか

と思えば、遊郭へ縛込む」——が典型像であつた。力には力で対抗し、両派は選挙のたびに激突した。

角太郎は、八王子や青梅などへ応援、演説に出掛け、立てたけ乃是心配で胸がつぶれる思いであつたことだろう。

「人力車の車夫が提灯の火を消して走つた」「川をもぐつて逃げた」等の逸話が今でも語りつがれている。

大正十年の村委会議員選挙での当選は政友会六名、憲政会十名であつた(不明二名)。

政友会が憲政会をしのぐ勢いの時もあつたという。

この頃、府中町では、府中多摩農民運動の指導者となつた矢部甚五が活躍していた。甚五は十八、九歳頃、キリスト教徒の相馬愛蔵から強い影響を受けた。相馬愛蔵は後日、若い芸術家たちやアジアの民族独立運動家たちの庇護者としても、新宿のパン屋「中村屋」の主人としても有名になつた人物である。甚五は、反政友会に肩入れする政治青年となり、大正十年、三多摩で初めての農民組合、「府中多摩農民組合」を結成する。町田の鶴川村の萩生田仙之助は甚五を頼り、しばしば会つて教えをうけ、鶴川農民組合を結成した。当時の労農運動はキリスト教的ヒューマニズム

ムの要素を含んでいた。公娼廃止運動・禁酒運動も同様であった。

府中のキリスト教徒中山直行は、大正初期に鍛金工組合の活動家となり、その全国組織の創立者の一人となつてゐる。

キリスト教徒の賀川豊彦は、神戸の貧民窟に身を投じ、どうしようもない貧しさゆえに僅かの金で娘を身売りする人々と、湯水のように金を使う戦争成金の生活をつぶさに見て、キリスト教社会主義の道へと進んでいく。そして労働運動に身を投じ、後には小作争議を支援した。神戸キリスト教青年会館で日本農民大会が開かれた際、賀川の起草した宣言、綱領、主張が可決された。

また、岡山県では、賀川豊彦の影響を受けたキリスト教徒などが農民運動の中心となつた。

八王子では、賀川豊彦のキリスト教社会主義などの影響をうけた橋本義夫が中心となつた教育文化運動がおこつた。

角太郎は、府中、八王子、町田などの人々の思想に共鳴し、行動に移したのであろうか。

資料は何も残っていない。後述するように（第三章参照）キリスト教関係の資料と共に、村長時代の資料も焼却され

たため、と思われるからである。また、村長としては筋を通し意見を押通したと言われる角太郎だが、私生活では寡黙で、村長時代の業績を語ることはめつたになく、大正時代の角太郎を知る人は殆どいない。

労働運動の波は砂川にも伝わつてゐる。

「ストライキという言葉を、この頃初めて聞きましたね。立川駅の近くの『丸通』という運送屋で、馬で生糸やなんかを運んでいたところで、村の人達に大分影響したってことですよ。みんな歩いて立川駅まで運んだりしたそうです」と、立川市上砂町（旧砂川二番組）に住んでおられる荒井一（77）さんは大正の少年時代の思い出をなつかしそうに語る。

角太郎は村長をしており、津雲国利（第一回普通選挙で当選。青梅）と親交があり、青梅にたびたびでかけ、津雲もまた島田家をよく訪れたという。立川村長の小川孝喜や初代立川町長の中島舜司とも親しかつた。三多摩の動きに對し、角太郎は何を思いどのように行動したのであろうか。

砂川は、自作農が多かつた。大正二年、畑の小作率は十九%にすぎず、小作料も反当り十円前後であり、全国平均

十八円（大正十年）よりも安かつた。全体として砂川の地主・小作制は小規模なもので自作が中心であった。また、大正三年の「主要物産表」によると、繭十六万円、生糸六万円、桑苗六万円であり、陸稻一万八千円、大麦二万円を大きく引離し、穀物、野菜が自給用で、商品生産の中心が圧倒的に養蚕業関係であった。

明治時代、砂川では岡部製糸、共同製糸、小沢製糸ができたが、四十三年には閉鎖され、その後、大きな工場などは作られていない。

砂川では、労働争議、小作争議は起らなかつたといえる。

砂川では、飢えに苦しむほどの極貧層はいなかつたし、戦争成金や大金持はいなかつた（砂川源五右衛門が明治二十四年の甲府鉄道の株主に名を連ねているが、筆頭株主の雨宮は二千株に対し、八十六株であった）。

角太郎の眼は労農運動に向けられることはなく、困つてゐる者、貧しい者たちを個人的に助けてあげたのではないかと思われる。生糸で利益を得、土地、貸家などを所有していたが、それらの私有財産を投げうつて、集会所を建てたり、村人に尽くしたりした、といわれている。

大正九年の不況に際して、角太郎は村長として、生活困窮者の救済に当り、又一方では交通産業の発展を促進するために、道路の整備にも力を入れたようである。

この頃、大正、昭和初期にかけて、八王子から神父が定期的に巡回していた、立川駅から残堀川沿いの道を、裾の長い黒の僧衣を着て、いつも聖書を読みながら歩いて来るのを、砂川の人々はよく見かけている。神父は、毎週同じ曜日、同じ時刻の決まった場所に現れて、子供達にきれいな絵を書いたカードを配り、十人位の子供たちが絶えずむらがつていたという。

角太郎はキリスト教徒であり、信者は百名ほどおり、キリスト教徒の村委会員も生れている。角太郎は、幼い日からキリスト教の自由平等の信念と親しんでいる。人道主義的な考えを何らかの形で村政に実践してはいないだろうか。

砂川村は、教育には熱心であった。

明治三十年の歳出総額一三五五円のうち九一〇円（六八%）が学校費（西砂川学校、同分校、中砂川学校、東砂川学校）であった。昭和三十年の学校教育費は三五・三%で、市部平均教育費は一一%であった。教育費負担が砂川の財

政の中心を長年占めていた。

大正期、「砂川小学校（現在の八小）第十三代校長本木喜代作氏等の提唱により、村内児童には、平等の精神により校服を制定し、盲縞の校服を着用した。ために他市町村へ訪問した際など『カラス学校』と言われた」（『立川市史研究 第十冊』）。村内全ての児童に平等精神に基づき校服を着用させるためには、村長である角太郎の協力が必要ではないだろうか。自由平等の雰囲気があつたから提唱出来的ではないだろうか。そして、角太郎が積極的に遂行したように思える。

府立二中（現立川高校）では大正七年、吉野作造を招き講演会を催した。十四年の学友会雑誌に校長原田長松の自學自習論が掲載された。
作文教育に新風をおこし、文芸、自由詩、图画教育で自由画などを盛んにした児童尊重の大正期の教育思想は、立川村にも影響を及ぼしているのである。

一方、村長として、角太郎はさまざまな業績を残した。

大正期に建てかえた砂川村役場は、三多摩で初めての鉄筋コンクリート建てであつた。

また、「砂川村庶務綴」によると、大正七年、砂川村を

中心に東京府桑苗同業組合、同年、砂川村第一養蚕組合、八年、全村一円とする砂川購買信用組合（現在の立川農業協同組合）設立、とある。

この他にも、「砂川村長」と記されている書類があり、角太郎は村長として、砂川村の産業の発展に貢献したと思われる。

しかし、民衆の声が生かされ、デモクラシーの風潮が社会を明るくいろいろどつたのはしばらくの間だけであつた。

高まる民衆運動に脅威をおぼえた政府は、普通選挙法と抱合わせに治安維持法を成立させた。

日本は、朝鮮、満州への侵出、支配を強めていく。

そして、軍国主義の波は、砂川にもおしよせてくるのである。

三、焰となりて

角太郎はまもなく六十の還暦を迎えていた。一人娘の肇は体が弱かつたためか、「丈夫な人を婿に迎えたい」と日頃口にしていたと言ふ。

肇は、父の角太郎に似ていた。たけ乃是小柄で、角太郎は太っていて恰幅がよく、肇は大柄でスラッとしていたという。家中にいる事が多く、もの静かだった。夏は涼しそうな洋服を着る時もあったが、きれいな着物を着、袴をしてハイカラだったという。

肇は、洋裁が得意で、西砂川小学校で裁縫を教えたこともあった。六畳の部屋でよく洋裁をし、帽子も縫つたといふ。縁側でアメリカ製のミシンを使っていた。近所の娘たちに洋裁を教えていたが、針が一本だけ見つからず、生徒たちと一緒に見つかるまで捜したこともあった。

砂川五番に住んでいた篠崎佳平（八人きょうだいの三男）は、師範学校を卒業し、砂川小学校の教師をしていた。フロックコートにステッキ、山高帽を高めにかぶり、金縁眼鏡をかけた、紳士的な青年だった。

まじめで体格もよく体の丈夫な佳平を、角太郎は娘の婿にと望んだ。

しかし、佳平は、キリスト教に関心がなく、信徒になる考えはなかった。

この頃、砂川の信者は減少の傾向をたどっていた。戦争へと進む暗い時代を歩み、布教の道が閉ざされようとして

つある中で、砂川では、キリスト教から仏教へと變る者が出てきた。

暗い時代の到来を予感しながら、角太郎は一人娘の花嫁姿を見たい、早く元気な孫の顔を見たい、跡継ぎの男児の誕生をと、明るい知らせを待ち望むことに光を見い出したのではないか。

昭和二年、結婚式が挙げられた。肇二十五歳、佳平二十四歳であった。佳平を迎える為に家は改築された。



肇 25歳頃

四年、佳平の父が村会議員に当選。

同年、砂川小学校が全焼した。角太郎は後始末と再建に力を尽くした。村長在任中の角太郎の力は大きかった。

砂川一番で、二月に大火災が起こつたばかりで、農村不況の折、村の財政は苦しかった。当時は村を二分し、砂川小学校通学区域を第一学区、西砂川小学校通学区域を第二学区と区分していたが、第一学区の地域は特別税外負担を支出する結果となつた。この後、佳平は本郷の小学校に転任した。

この年、島田家に女兒誕生。ミエ子と名付けられる。

佳平は、本郷の小学校に十九年まで勤める。

佳平は、毎晩たけ乃の肩をたたいたり、もんだりした。たけ乃是、よく佳平に用事をいつけたという。

「たけ乃是さんはしつかりして、いた人でしたね。まあ、しつかりしてなきや、村長の妻はつとまらなかつたんでしょうけど。家の中の采配はたけ乃さんがとりしきり、にらみをきかせていました」と、森谷千枝さん（72）は言う。千枝

さんの母と角太郎が従姉弟で、時々遊びにいっていた千枝さんを、たけ乃是「おちえ、おちえ」と呼んで、かわいがつてくれたという。

角太郎の甥（定吉の子）の島田春雄さん（79）は福島県

に住んでいたが、昭和三〇六年の夏休みは毎年島田家で過ごし、麻布の中学に通っていた時は時々遊びに来ており、「伯母さんにはよくおこられました。外で遊びに来ており、て帰つて来ると、『着がえなさい。足を洗いなさい』と注意され、箸のあげおろしまで文句をいわれた」とあって、うるさかつたですね。伯父さんは全然かまわなかつたですね」と、思い出を語る。

「お義母さんはきつい人だった」と、佳平はもらしたことがある。

師範学校出の秀才で後に（昭和二十二年～二十七年）八小の校長をつとめたインテリである佳平は、小学校を出るか出ないかで女工になり指導能力を認められ、結婚してからは家の内をしつかりととりしきり、村長の妻として角太郎を影でささえ、気丈な面を前面にださざるをえなかつたたけ乃に、姑としてつかえながら、息苦しい思いを積もらせていったのであろうか。

たけ乃是、昭和九年に亡くなる。五十五歳であった。

「伯父さんと伯母さんは仲がよかつたようですよ。夫婦喧嘩をしているのを見たことがなかつたですね」と春雄さんは言う。

角太郎は、明治時代にあって女の子を一人しか生まなくとも、たけ乃の貧しい実家を援助（現在でも、子孫は島田家の方角に足を向けて寝られないほどと言う）した。家のことはすっかりまかせつくりにでき、村長の、教会の活動をささえ、けなげに働く十三歳年下のたけ乃を愛していくのではないだろうか。角太郎がたけ乃をどのように愛しく思っていたのか、具体的に聞くことは出来なかつたが、たけ乃の死後、再婚はしなかつたことからみても、角太郎はたけ乃を終世の妻として大事にしていたのではないかと、私には思えるのである。

一方、砂川のキリスト教徒たちは、少なくなつていった。昭和四年の不況で打撃を受けた生糸は、衰退へと向かつていき、生糸と結びつき信仰の根をおろしていった砂川のキリスト教は、生糸と盛衰を共にしていく。

昭和三年、治安維持法が改悪され、特高警察が全国に設置された。

昭和六年、満州事変勃発。

大正十一年に埼玉県から移転してきた立川飛行場（買収用地・立川村一四五町、砂川村二町）は、戦火が拡大され

るにつれ拡張していった。昭和六年に建てられた無電塔は立川で一番高く、頂上の陸軍のネオンサインは、立川、砂川などの闇を照らした。飛行機増産は至上命令となる。七年、九一戦闘機、八八式軽爆撃機の生産を開始した。八年五月、昭和天皇が立川を行幸した。同年、民間航空会社が移転した。立川飛行場は軍備上の重要性を増していき、八月、編成変えで名実共に帝都防空の使命を確立した。拡張されていく飛行場に働く人達の住宅・南部住宅、江ノ島住宅が、砂川に建てられた。戦火の拡大は、砂川にも影響を及ぼすようになってくる。

昭和七年五月十五日、一部の陸・海軍の青年将校が首相官邸、日本銀行、政友会本部などを襲撃し政友会の大蔵首相を暗殺。このあと軍部出身の内閣が続き、政治は政党から離れていく。

満州事変から日中戦争、さらに太平洋戦争へと、日本は軍国主義の道をつき進んでいった。

「伯父さんと伯母さんが礼拝しているのを見た」とがなかつたですね。父は熱心なキリスト教徒で、福島では自宅

の敷地に天主公教会平出張所を建てて礼拝はかかさなかつたと思つたもんですが」と春雄さんは語る。

キリスト教になかなかないじめない佳平に遠慮したのであらうか。それとも、軍都として発展していく立川と隣接する砂川では、外国人の宗教として敵視されたキリスト教の信仰を、表面に出すことはより困難な時代となつていつたのであらうか。

信仰に若き日の情熱をそそぎこんだ角太郎も、六十路を迎えて、村長を辞めた後、圧力をはねかえすことが困難になり、村人への影響が弱まつていく中、信仰に対する気持ちは薄らいでいったのであらうか。

昭和十年代、立川町のカトリック信徒は、特高警察から、職場に見回りに来られたり、夜中に机の中をあらざれるなど、監視されている。

砂川では、僅かの信者が、人目をしのんでこつそりと教会を訪れるだけとなつていった。教会に殆ど人は集まらなくなってきた。

昭和十五年七月、政友会解党。八月民政党（旧憲政会）解党。

同年、入院していた肇が亡くなる。三十八歳であった。佳平は再婚した。

村長をやめたあと、角太郎は乾繭倉庫の役員と、製氷会社の社長をした。

角太郎は、感情をあまり表さない人で、酒も飲まず、煙草も喫わなかつた。新宿へ出掛けた時に、デパートへ寄つて珍しい台所用品を買うのが好きだつた。

「おじいちゃんは新しい物が好きでした。外国に行つたことはなかつたけど、神父様とか外国人の人と話す機会が多かつたし、その頃、氷を利用した冷蔵庫が家にあつて、コ一ヒー・ミルもありましたよ。父が本郷の学校から帰る途中新宿の『中村屋』に立寄つてパンは一日おき、バターはまとめて四分の一ポンド買つてきて、おかげは野菜いためなんかで、パン食でしたよ」と佳平と肇の一人娘であるミニ子さんは当時の生活を振り返る。石油コンロもあつた。専用の井戸から台所へ水をひき、蛇口を押すと水がでた。モダンな生活であった。

贅沢が敵視されるようになつたため、製氷会社は十五年頃に閉鎖した。乾繭倉庫の役員は戦時中も続けていたといふ。

佳平は、キリスト教を、最初は嫌っていたようであるが、

肇と結婚して理解しようとした。しかし、時代はキリスト教に対して厳しい方向へ進んでいった。軍国主義の谷間でキリスト教徒というだけで白い眼をむけられた時代でもあった。角太郎が洗礼を受け、村の人々に信仰が浸透していく頃とは反対に、人々は信仰から離れていく状況にあつた。佳平には新たな困難に立向かうほどの情熱がもてず、信仰の道を進むことが出来なかつた。

終戦後、キリスト教徒は、島田角太郎と境家の者だけになつていた。

角太郎は、昭和二十七年五月六日に亡くなる。

葬儀はキリスト教式でとりおこなわれた。神父の代りに角太郎の甥（従の子）良一氏（杉並区在住）が祈りを捧げた。三百名以上が葬儀に参列した。

以後、教会は顧みられることもなく、教会の十一畳ほど の部屋に資料、書類がうず高く積もられたまま、長い間放置された。キリスト教関係の資料と共に、村長時代や共同製糸、乾繭倉庫、製氷会社など、角太郎が関わった全ての資料が、故人の業績をしのばせるように、一部屋に積もら

れていた。

佳平にとって、角太郎はあまりにも偉大な存在であった。実父の村会議員当選にも、小学校が全焼した際にも、角太郎の力が大きく寄与した。角太郎は教会、政友会の中心人物であり、村長であり、教育の功労者であった。

砂川のキリスト教について訪ねてくる人があれば、佳平は、洗礼者名簿やその他の資料を見せたこともある。しかしキリスト教について、何も説明することができなかつた。

島田家は、昭和四十年頃、仏教に変つた。

「佳平さんはとつてもいい人でしたよ。スクーターで学校へ通つていましたが、娘を後ろに乗せてくれたこともありましたし、やつかいになりましたね。校長を退職したあと、保護司をやつたり、青少対委員長を熱心にやりましたよ。会議を島田さんの家でやつたりもしましたが、気楽に集まりに行ける人でしたね」と荒井一さんは佳平さんの印象を語る。佳平も教育や地域に貢献しており、尊敬もされていた人でもあった。

しかし、佳平の心の片隅には、恩を受けた角太郎の存在を乗り越えたいという願望と苦悩が、くすぶり続けていた

のかもしれない。また、子どもは女の子一人で、肇が若くして亡くなり、すぐに再婚したことで、養子として十分期待に答えられなかつたことに、負いめを感じていたのではないか。

聖トマス教会を東京都有形文化財に指定したいという話がもちこまれた。しかし、島田家に、生糸が全盛で生糸に深く関わった薫と角太郎の頃の、敷地内に教会を立て宣教学校を開いた頃の財力は、生糸の衰退と共にすでになかつた。また、キリストの教えも知らず、教会の歴史について何ひとつ知らない佳平にとって、教会や資料を維持していくことが、精神的な負担となっていたのではないだろうか。

昭和四十六年、教会は壊され資料類は燃やされた。

かつて、砂川二番の殆どの住民がカトリック信徒となり、多くの信者から見守られた、聖トマス教会であった。

「資料はとつといてほしい、と何度もたのんでおいたんですけどね。燃やされた時、私には何も知らせてこなかつたんですよ」と、ミエ子さんは残念そうに語った。この時、ミエ子さんは立川市富士見町に住んでいた。

家の前に穴が掘られ、資料が次々と投げこまれ燃やされ

た。焰は何時間も空を焦がしたという。

島田角太郎について、『立川市史』は、何も語っていない。

この項をまとめるにあたって、町田市立自由民権資料館の新井勝絵氏にお力添えをいただきました。

川久保 ミチエ

参考文献

- 『砂川の歴史』 砂川町発行
- 『立川市史研究 第十冊』 立川市史編纂委員会
- 『多摩のあゆみ V o l . 4 1 特集 多摩の大正時代』
多摩中央信用金庫発行
- 『府中市史』下巻 府中市史編纂委員会
- 『大正デモクラシー』 松尾尊 岩波書店
- 『日本の歴史23 大正デモクラシー』今井清一 中公文庫
- 『三多摩の壮士』 佐藤孝太郎 武蔵書房
- 『死線を越えて』 賀川豊彦 教養文庫

砂川・ある昭和史断章

今から五十三年前の二月二十六日未明、一部隊付将校と下士官以下、約千四百名の武装兵士が東京、永田町一帯を占拠し、政府要人を次々殺害するという斬奸事件、いわゆる「二、二六事件」が勃発する。

事件の一ヶ月半前の一月十日、陸軍歩兵第一連隊に入隊したばかりの初年兵の中には砂川出身の三人の兵士がいた。ここに登場していただいたのは、その三人のうちのお一人と、二、二六事件時の「戦友」、のお二人である。

下級兵士の一・二・一・二六事件

—ある初年兵からの聞書き書き—

一、ある初年兵の回想より

ここに昭和十三年十一月四日付けの読売新聞多摩版の新聞記事の切り抜きがある。五十年の風雪を物語るように、写真入り三段抜きのこの切り抜きは全体に黄ばんで、ところどころ薄くしみの跡が見える。四つ折りにたたんであつたところは深い折線がつき、活字は判読しにくい程に薄れてしまつていて。かすれて見える活字を追つていくと、記事の見出しにはこう大きく書かれてある。

「前線に勇士あれば
銃後に強き女あり

佳節に薫る軍國の村」

この切り抜きは、記事に勇士として紹介されている荒井賢次さん（立川市上砂町在住、七十四歳）の姉にあたる小山菊枝さん（福生市在住、七十六歳）が五十年もの間肌身

離さず大切にしまい込んでいたものである。記事にある「銃後の強き女」とは菊枝さんら三姉妹のことであり、「軍國の村」とは賢次さんと三姉妹の生家のある当時の砂川村のことである。

菊枝さんにとってなぜ、それほどまでにこの切り抜きが大切なものであつたのか。そのもとを探つていくと、今から五十三年前の昭和十一年（一九三六年）二月二十六日、東京の永田町一帯を占拠し、政府要人を次々殺害して日本じゅうを震撼させた事件一一・二六事件にたどりつく。菊枝さんの二つ下の弟、荒井賢次さんは、一一・二六事件に初年兵としてかかわった砂川出身の兵士三名のうちのおひとりである。

砂川在住の「つむぐ」の読者の方から荒井賢次さんを紹介されて砂川二番にあるお宅をお訪ねしたのは、一年前の七月十日の日曜日のことであった。梅雨の晴れ間からのぞく太陽がジリジリと照りつけ、体じゅうから汗が吹き出すと思えるほど蒸し暑い日であった。通された応接間の書棚には二・二六事件関係の書籍や資料がぎっしりと並び、背表紙のタイトルを見ただけでも昭和史を彩る一一・二六事件の事件としての大きさに改めて圧倒される思いであった。

「一一・二六事件に参加された下級兵士とその家族の方た

ちにとつてあの事件は何であつたのか知りたい」という私の唐突とも言える申し出に、荒井さんは

「そうさね、いろんな人がいろんな本を出ししているが、みんな自分に都合のいいように書いたり言つたりしていると思うよ。初年兵で言えば埼玉と東京出身の者が多かつたから、下級兵士の立場では埼玉県が出している『二・二六事件と郷土兵』がわたくしら初年兵の気持ちや意見を代弁していると言えるね」とおっしゃる。また



前線に勇士あれば 銃後に強き女あり

佳節に薫る軍國の村

いかにも「砂川の人」らしく実直で寡黙な荒井さんのお宅へそれから何度も足を運んだことだろうか。行く度ごとにかけない事柄が幾つもあった。その一つが新聞記事の切り抜きの一件である。事件当時の状況のことになると、「もつと詳しい人がいる」と二・二六事件の「戦友」であつた増子美忠さん（田無市在住、七十二歳）を紹介してくださいり、今年の二月十二日にはお二人の案内で事件の跡を歩いてみることになったのである。

二月十二日、午前十時、すでに寒氣のゆるむ時刻とはいえ、二月の冷氣は赤坂、六本木をすっぽりと包み、張り詰めた空氣は肌を突き刺すほどに冷たい。前夜若者たちが群れ集つた盛り場は朝日を拒むかのように固くシャッターを降ろしたままだ。この日私は「つむぐ」の他のメンバーと

「家族の者と言われていも、私がすでに七十四歳だからね。おふくろもおやじも死んでしまつていてるし、兄弟といつても五十三年も前のことだからね。どの程度のことを覚えてるかね」と、勢いこんで出かけた私には少々心もなくもどれる口振りであった。

いかにも「砂川の人」らしく実直で寡黙な荒井さんのお宅へそれから何度も足を運んだことだろうか。行く度ごとにかけない事柄が幾つもあった。その一つが新聞記事の切り

抜きの一件である。事件当時の状況のことになると、「もつと詳しい人がいる」と二・二六事件の「戦友」であつた増子美忠さん（田無市在住、七十二歳）を紹介してくださいり、今年の二月十二日にはお二人の案内で事件の跡を歩いてみることになったのである。

昭和十一年二月二十六日未明、前夜から降り出した雪が赤坂、六本木を白一色に覆い尽くした。

西武拝島線玉川上水駅を早発し、電車を乗り継ぎ、JR線信濃町駅からタクシーを飛ばしてお二人との待ち合わせ場所である防衛庁正門前へと向かつた。

明治六年歩兵第一連隊が創設されたとともに連隊本部が置かれた現防衛庁二十号館は、もとは毛利公藩邸の跡であった。現在の建物は大正十二年の関東大震災で倒壊し、昭和四年（一九二二年）にドイツ人の設計で新しく建てかえられたものである。建て面積約四百平方メートル、鉄筋二階建の、全体に丸みをおびた洒落た西洋館からは、連隊本部というような硬い場所を想像するのは難しい。建物の正面には敗戦時まで掲げられていた菊の御紋章の跡が窪みとなつてうつすらと残り、時の移ろいを刻んでいる。

防衛庁の外苑東通りを隔てた向かい側には東大生産技術研究所がある。そこには警視庁を襲撃した部隊・歩兵第三連隊が置かれていた。一・二六事件はこれらの部隊が主戦力となつて起こされた事件であり、赤坂、六本木は事件の序章となつた所でもある。

防衛庁正門前、かつての歩兵第一連隊の兵営から襲撃目標となつた首相官邸までは約二キロの道のりである。



防衛庁（旧歩兵第一連隊本部）周辺地図

午前零時、歩兵第一連隊に慌ただしく呼称がかかる。

「起きろ！」力のこもった低い声に目を覚ます。

「まだ時間はたっぷりある。落ち着いて支度をしろ！」
何となく慌ただしい雰囲気だ。荒井、増子ら初年兵はまた非常呼集なのかと思つて支度を整える。

「お前たちにいつも言つている時がきたのだ。お前たち
は俺の言つこと、二年兵の指揮に従えばよいのだ。後へ退
くと撃つぞ」と班長が徒手帶剣巻き脚絆姿で命令をする。

言わるとおり下帯（褲）を新しいのに取り換え、二二装（外出時の軍服）を着用し當庭に整列する。外は真っ暗で凍てつくような寒さであつた。當庭には第一機関銃隊の兵士約三百名が集められた。そのうち初年兵は二百三十名程である。彼ら初年兵は一月十日、志願や徴兵によつて集められた十八歳から二十歳までの入隊間もない若者たちである。その中には甲種合格を果たしたことを誇りとし、帝国軍人として晴れて天皇にご奉公できることを何よりの光榮と思う者もいれば、残してきた家族への追憶の情にたえない者もいた。しかし軍隊はそんな甘い感傷や若者の気負いなどこつばみじんに打ち碎いてしまうところである。鉄拳制裁を浴びて市井の垢を落とし、軍人精神が叩きこまれていく。

當庭には機関銃がズラリと並んでいた。分隊長の指揮のもとに全員配置につく。指揮官の栗原中尉が出発を前に指示を与える。

「お前たちは俺の命令によつて動くのだ。俺がいつも言つていることを守つてやればいいのだ。三銭切手を貼つてある者は味方の指揮官である。皆に合い言葉を教える。『尊皇・斬奸』と言つのだ。覚えておけ！」力強い号令であ

った。林小尉のマントの下からは時々まぶしいばかりに白だすきがのぞく。

午前四時三十分、栗原中尉に率いられた歩兵第一連隊機関銃隊は襲撃目標である首相官邸へと出発する。しかしこの時点では初年兵らは「大事なことを起こそす」ということは漠然と理解したもの、どこへ、何のために、ということとは全く知らされていなかつた。道路は冷たく凍り、ただ黙々と後に続いて行進するだけであつた。

途中、隊は二つに分かれる。栗原中尉指揮下の本隊は六本木の交差点から簗笥町を抜け、溜池方面へと進み、林小尉指揮する突入部隊（第七分隊）は裏道を通つて溜池で本隊と合流する。荒井は栗原中尉指揮下の本隊に、増子は林小尉指揮下の突入部隊に配属となつた。当時溜池にあつたブリジストン本社の前で、荒井、増子ら初年兵は初めて栗原中尉から行動の目的と目標を教えられたのである。

入隊して二ヵ月足らずの間、教官である栗原中尉は「昭和維新」「天皇親政」「國家改造」など難しい話をかみくだくよう繰り返し繰り返し初年兵らに話して聞かせていく。実践訓練にしても、その考え方や熱の入れ方は特別に厳しく、そして激しいものであつた。難しい話ではあっても、多くが貧しい農家の出身者である兵士たちには、農村

救済のために重臣を倒し、天皇親政の国家をつくるのだと
いう栗原中尉の訓話の論旨には納得できるものがあった。
それには栗原中尉や林小尉の部下思いで潔癖な人柄も大き
く作用していたようである。

荒井や増子は「いよいよその日がきたのだ」と心が引き
締まる思いがした。冷えきった手で革に弾を詰め、隊列
を整え直して官邸へと向かう。歩兵第一連隊の営門を出て
から一時間後の五時三十分、栗原中尉は自ら小銃隊を率い
て表門より邸内に侵入、林小尉に率いられた突入部隊は表
門よりさらに裏手へと進んだ。

負けん気の強い増子は内玄関脇の八畳間の硝子を割り、
真っ先に邸内に乗り込んだ。突然の侵入に警備の者たちが
右往左往する。瞬間、増子らは警備の者たちに向かって発
砲した。なだれ込むように首相の寝室である十五畳程の日
本間に行つてみると、そこには首相の姿はなく、倫子の布
団が敷かれたまままであった。布団の中に手を入れてみると、生温かい感触がかすかに残っている。まだ遠くへは行
つていないと判断し、家の中を探しまわるうち、風呂場
近くの中庭の藤椅子に腰をおろしている老人を見つける。
「あつ、首相がいるぞ！」と誰かが叫ぶ。老人は観念した
のか、静かであつた。近くにいた者は皆老人に向かつて一

斉に発砲した。（後にこの老人は首相の妹婿である松尾伝
戒予備役大佐と判明する。）

「ヤッタ！ ヤッタ！」と少しばかり興奮した声が起ころる。

「イヤー、一国の總理にしては下着が汚れているな」と
疑う将校の声も聞こえる。しかし栗原中尉が応接間にかか
つていた肖像画と見比べて「間違いない」と判定、その
ひと声で首相であるということになつた。それほどまでに
この二人の面差しは酷似していたのである。この肖像画を
応接間に取りはずしに行つたのも増子であり、もどに戻し
に行つたのも増子である。増子の心は得意の絶頂であつた。
体は踊つているかのように軽やかであつた。応接間に肖像
画を戻しに行く途中の廊下で、突然足首に強い衝撃を受け
る。弾が右足のふくらはぎを貫通しかかとをかすつた。刺
すような痛みが体じゅうを走り、歩行はもはや困難であつ
た。左靴のかかとが破れ、そこから血が吹き出でいた。増
子はそのまま牛込にある陸軍病院にかつき込まれる。時計
は六時十分を指していた。増子はそのまま陸軍病院にいて
事件の結末を知るのである。

首相官邸での犠牲者は松尾大佐を初め、巡査部長村上嘉
茂衛門、巡査小館喜代松、土井清松、清水与四郎ら五名に
も及んだ。増子と行動を共にした同じ突入部隊の初年兵・

島崎正次、関口健司、石田菊太郎、永井に八郎らはこの時の発砲を理由に特設軍法会議にかけられることになるのである。

荒井ら首相官邸にこもり行動を続けていた兵士たちはどうしていたか。ある初年兵の手記（二・二六会編、昭和五十一年二月発行）をもとに事件の四日間をたどつてみよう。

二月二十六日

午前九時、栗原中尉を先頭に軍用自動車三台に六十名もの兵士が分乗し、吹雪をついて朝日新聞社へと向かい襲撃する。「國賊・朝日新聞は多年自由主義を標榜し、重臣ブロックを擁護し来たり。今回の行動は天誅と思え云々」と叫び、活字ケースなどをひっくり返し自茶苦茶にする。東京、日々、時事、報知、国民新聞社らには決起趣意書を渡して引き上げる。

夕方になると、栗原中尉は溜池付近の警戒配置を巡視に出かける。巡視中、群衆に対して行つたアジ演説にヤンヤの拍手が送られているようだ。下の方から「バチバチ」と手をたたく音やどよめきが聞こえる。「教官は男前だからなあー。姿も良いし、話し上手だから」と噂し合う。官邸に引き上げた兵士たちは夕方客室に陣取つて休息し、

その後邸内を一巡する。ほとんどが貧しい農村の出身である兵士らは、官邸内にある調度品、照明、食器、装飾品などの豪華さに目を瞠るばかりであつた。部屋のそこ、ここには硝子の破片が散乱し、散弾が壁に穴を穿ち、血痕が床の上を這い、目を覆うばかりの惨状である。

客室にはビール、サイダー、酒類が運ばれてあり、飲み放題であった。連隊から届けられた外套を着、炭火を炊いて暖をとり、交代で官邸の警備に当たつた。第一日目は初めて見る安樂椅子に寝そべり、心地よい仮眠のうちに過ぎていく。

※二十六日の時点では二・二六事件の最大の謎と言われる大臣告示が出され、決起部隊は戒厳部隊に編入となる。友軍として治安を任せられるとされたのである。

二月二十七日

朝がきた。まる一日同じ場所で過ごしたためかすっかり慣れた気がする。休息の時に中庭に出てみた。誰が記したのか、桜の木の幹に遺言めいた言葉が刻みこまれていた。すべて命令に従い、恥ずかしくない死に方をしなければと複雑な気持ちになつてくる。昼を少し過ぎた頃、急に周りが慌ただしくなつてきた。静かだった官邸内に殺気が漂う。戒厳令が敷かれたことを知らされた。もともと二等兵とし

て陛下に捧げた命、すべて上官の命令によつてやつたこと、叛乱軍と呼ばれようと気持ちの動搖はない。二等兵は二等兵らしくありたかった。

※二十七日は「緊急勅令」が公布され、警備指令部が戒厳指令部となり、事件の第二段階に入る。軍首腦部が事態收拾に一步踏み出す。

二月二十八日

戦場に朝もなければ夜もない。ただ夜にかすかなれど仮眠があるのみだ。朝、明るくなつた前方の国会議事堂の建物の周囲に鉄カブトと防弾チョッキらしき服装の兵隊が沢山見えた。我々を包囲しているのかもしれない。中庭に出て前方を見ると、六本木方面の高台地に砲列が敷かれていた。砲口はすべて宮城を避けて横になつていた。砲座には射手弾薬が正規の位置についているのが肉眼でもよく判る。「向こうさんが皇軍ならこちらも皇軍だ。義軍だ。奸賊討伐にきた皇軍中の皇軍、義軍だ」と心につぶやく。

午後から状況が一変したようだ。我々の包囲網はまた一段と狭められていった。スピーカーからは「兵に告ぐ！ 今からでもおそくはない」と、繰り返し繰り返し帰順を促す呼びかけが流されている。

食糧ももはや十分でなくなつていたが、緊迫した空気を吸ついたためか、腹もすかなかつたようだ。人間死を覚悟すると腹も減らずに一人前に働けるものかしらと思う。栗原中尉も林少尉も多忙を極めていた。重苦しい空気の中で夜を迎える。眠りにつけないまま、寝床の中で思案にふける。これからどうなるのだろうと走馬灯のようにさまざまでなことが脳裏をかすめる。時の流れに従うより我々には何もないのだが……と考え続けていると、ふいに「集合！」の声がかかる。空にはすでにさえざえと星が広がつていた。

※二十八日午前五時八分、「奉勅命令」が下達された。決起部隊は叛乱軍とされ、下士官以下兵士は原隊に帰れといふ天皇の命令が下されたのである。その後この奉勅命令をめぐつて陸軍と叛乱軍との間に見解の相違があつたことが明らかになる。

二月二十九日

栗原中尉が兵士全員を集め、「昭和維新ついにならず。お前たちは隊に戻れ」と涙ながらに最後の指示をする。無念であった。傷悴しきつた中尉にすがつて泣く者もいる。肩を落として去つていく栗原中尉の後を兵士たちのすすり

泣く声が追う。

やがて二十名ずつ一組にまとめられ、兵士たちは護送車に詰め込まれる。三十分くらいして車は停車し、「降りろ！」と命令された。慌てて飛び降りてみれば、そこは懐かしい歩兵第一連隊の營庭であった。あれ程つらい毎日を送った兵舎をこれ程懐かしく思えるのが自分でも不思議でならないなかつた。暫く目頭を熱くして兵舎をながめていた。

初年兵として二・二六事件にかかわった荒井、増子らとその家族にその後どんな人生が待ち受けていたのだろうか。お一人と、お二人の関係者の方からの証言をもとに書き進めてみたい。

※は筆者の注

二、「戦場に勇士あれば 銃後に列婦孝女あり」

荒井賢次は大正四年（一九一五年）三月十八日、砂川二番組（現上砂町）の自作農、荒井薰太郎・フトの三男として生まれる。母フトは明治十一年六月の生まれで、明治四十年に父薰太郎の後添いとなり、賢次を含めて男女五人の子をなす。フトは若い時分から父母を助けて他人の家で働き通し、薰太郎の後添いとなる明治三十年代後半頃には砂川六番にあつたふるい絹を織る機屋「きぬ屋」に奉公していた。持ち前の勝ち気な性分に加え、気丈で厳格という母の性格は、若い頃の他人の家での苦労の中で培われたものであろう。

もつともその頃はフトに限らず農村はどこも貧しく子だくさんで、子供は十一歳から十二歳にでもなると口減らしに奉公に出されたり、家にいられる場合でも子守りや野良仕事を手伝い、一人前の立派な働き手として家を助けた。

荒井家では昭和八年に賢次の兄を、翌年には父を病氣でたて続けに失う。十八になつたばかりの賢次は、畠一町

二三歩を持つ一家の大黒柱として家を取り仕切り、采配を振るわなければならない立場となつた。誰もが口を揃えて言う「氣丈な」母フトも、夫と長男を失つたことからすつかり氣弱になり、何かと賢次を頼りにするようになつてゐた。賢次もまた母を助け、家族のために身を粉にして働く自慢の孝行息子であつた。

やがて二十歳を迎えた賢次は徵兵検査を受けることになる。昭和十年の秋、砂川の同年の者たちと連れだつて府中にあつた郡役所に出向く。砂川二番組の部落からは八人が受け、そのうち甲種合格は賢次一人であつた。砂川村からは七十二人が受け、後にそのうちの三人が二・二六事件とかかわることになる。

昭和十一年一月十日、賢次は帝国軍人として赤坂にある陸軍歩兵第一連隊機関銃隊に入隊する。当時は甲種合格を果たして帝国軍人となることが「男子の本懐」とされていた。賢次が入營する日、砂川二番組の荒井家では親戚じゆうが寄り集まつて祝いの杯をくみかわし、「祝出征」と書かれた幟を立て、日の丸の旗と「万歳、万歳」の歓呼の声で賢次を送り出した。母フトも息子の晴れの姿を父親に見せてやれなかつたことだけが悔やまれた。賢次は帝国軍

人として恥ずかしくない兵隊になろうと心に誓う。

入營してまず賢次は軍隊というところが実にありがたいところだと思つた。兵營の固い寝台までが実家のせんべい布団より温かく、三度三度腹いっぱいの飯を食い、その上お給金までもらえるのはやはり幸せなことだと思うのだがつた。昨日まで見ず知らずの初年兵らとの共同生活も新鮮な休験だつたと今でも述懐する。共同生活といつてもそこは軍隊である。凍てつく寒さの日に上等兵らの下帯を洗い乾かし、理由もなしに殴られ、言い訳もせずじつと我慢するのはやはりつらいことであつた。しかし日が経ち、要領も身につき始めると、古参兵の鉄拳さえも立派な帝国軍人になるためなのだと自分に言い聞かせ耐えた。

几帳面で読書好きの賢次は入營したその日から一日も欠かさず日記をつける。二・二六事件の当日さえその習慣を破ることはなかつた。消灯が夜の九時と決められていたので、九時以降は廊下や便所の灯りで本を読んだり、日記をつけたり、手紙を書いた。母や家族あての手紙には近況を伝えた後に必ず「元気でいますからご安心ください」と書き添えた。女らしいことや親を心配させるようなことは意地でも書くまいと思つた。便所の五燭の灯りであつても砂

川のランプの灯りに比べればまだ「まし」と、改めて軍隊は「都會」というものを身近に感じさせてくれるところと思うのだった。農村の貧しさをいやという程骨身にしみて知っている賢次は、電球が切れて灯りが消えた時、農村出身の古参兵の一人が「電気の油を持ってこい！」と命令するのを笑う気にはなれなかつた。食べ物にしても「とんかつ」「カレーライス」などは軍隊に入つて初めて口にした食べ物である。その日の日記には「わらじほどのとんかつを食う」と書く。

当時初年兵の月給は五円五十銭、そのうち十銭は天引きされ除隊後に支払われることになつていて。農村育ちでしかも一家の大黒柱であつた賢次には、たゞえ休暇の日でも外出しお金を使って遊ぶなどということはとても考えられないことであつた。月給は「まんじゅう」などの補食とわずかの本と切手にあて、後は貯金にまわした。

賢次は毎日の日常身辺の出来事を日記につける。朝何時に起床から始まつて、学科のこと、訓練のこと、そして最後に必ず何時に就寝で終わる。初年兵たちにとつて唯一の息抜きは訓練の後の「酒保」行きだつたとある。

二月になると栗原教官の教練、精神訓話のことがたびた

び登場する。二月二十一日には、訓練の後、栗原中尉が初年兵にせんべいを買って与え、「必死の精神をもつて陛下のために死ね」というようなことを話したとある。

二月二十六日から二十九日までの四日間は事件の推移が簡単に述べられているほか、あとはただ眠い、眠い、眠りたいと書いて締めくる。日記で見る限り、十九歳か二十歳の初年兵らにとつて事件そのものの意味はほとんど理解されていないと言つてよい。

事件の終結後、兵営に戻つてみると、待ち構えていたのは周りの冷たい目と宮倉入りと一週間の禁足であつた。

事件終結後の三月一日には歩兵第一連隊の小澤政行機関銃隊長の名で、事件に関係した初年兵らの家庭に監督不行き届きを陳謝する詫び状が届けられる。（小澤隊長はその後任を解かれる）その詫び状を受け取つた砂川二番の荒井家はどうしていたか。

どうしてもご家族の方からお話を聞きたいという私のたつての希望をかなえてくださるために、荒井さんはご姉妹の間を取りもつてくださり、実現したのはお会いしてから二ヵ月後の十一月の終わりの日曜日のことであつた。「耳も遠くなつたし、一人じやいやだよ」とおっしゃる菊枝さ

んを説きふせ、菊枝さんの姉の吉岡愛子さん（昭島市在住、七十九歳）を同席させる手筈を整えての対面であった。お二人ともすでに八十六歳で亡くなつた母フートさんの晩年の年代にさしかかっている。当時お二人は二十六歳と二十四歳の娘盛りであつた。

「二・二六事件の後、うちにも憲兵が来ましたよ。昭和八年、九年と続けて兄と父を亡くし、なにしろ賢次がたようだつたからね。賢次のいない間、女手だけでも頑張らなくつちやと、くる日もくる日も真っ黒になつて一日じゅう野良仕事をして畠を守つてきたんだからね。つい愚痴の一つもいいたくなりますよ。小さい町の中のことですから人目につくしね。ある時憲兵がまた私たちの様子を見にきたんですよ。そんな時はあんまり悔しかつたから言つてやつたんですよ。『男手とられてうちは大変だ』とね。そしたら母親が『そんなことを言つたら賢次の身にふりかかつてくるんだから、賢次がかわいそうだから言うなあやめなよ』とたしなめるんだね。あの気丈で曲がつたことが大嫌いな人がね。あの時はさすがにこたえたんでしょう。母親だからね。出征していく息子のことが何よりも気がかりだつたんでしううね。

甲種合格を果たして入営する息子を誇らしく見送つてから二ヵ月後、叛徒・逆賊の烙印を押されて憲兵の監視を受けることになるなど想像もしないことであつた。無念であると同時に賢次がかわいそうでならなかつた。

賢次は事件から二ヵ月後、渡溝前の四月の終わり頃、軍用トラックに乗せられ家族との対面のために帰郷する。対面は二時間足らず、しかも在郷軍人と憲兵の立ち会いのもとに行われた。母フートはただ「家のことは心配するな」と一言言つただけであつた。

帰郷を済ませた後の五月九日、賢次は満州に渡る。任務は朝鮮北部の東辺道あたりの国境警備であつた。国境付近で金日成率いる抗日ゲリラと小競り合いをしたこともあつた。

昭和十二年二月、歩兵第一連隊の留守部隊勤務のため時帰國するが、十三年四月再度渡溝し、北満のシベリア国境の警備に当たつた。賢次のこの二度目の渡溝のことである。賢次の留守を守る姉愛子、菊枝、トミの三姉妹が「銃後を守る孝女」として新聞に大きく取り上げられ喧伝されるのである。

「前線に勇武の皇軍あれば銃後にはそれに勝るとも劣

らぬ孝女烈婦の護りがある。これでこそ帝国は躍進する。弾丸雨屍山血河も何のその、後顧の憂ひなき皇軍はここにこそ真の強さがある。戦時下の秋穂る農村に聞くも微笑ましい孝女物語」と前書きし、本文がこれに続く。

「^マ北郡砂川村二番組三五五、農業荒井愛子さん（二九歳）、キクエさん（二七歳）の姉妹は弟の賢次君（二十四歳）、秀二君（二二歳）の二人を戦地に送つて男手のない家に、村の勤労奉仕班、月一度の手傳いを頼りに、畑の土に塗れて甘藷の収穫に、市場への買い出しに懸命の努力をしている。末妹のトミさん（一六歳）も今春から立川陸軍航空支廠に勤務、家計の足しにと奮闘し乍ら、一家は朗らかに両君の陣中便りを楽しみに、老母フトさん（六一歳）を助けて、縁談も拒んで弟二人居ない家を護り続けている。お嫁入りもしなければなりませんのにほんとうに感心な姉妹ですと近所の人の話を聞き乍ら同家を訪ねる。老母フトさんも涙を浮かべて喜びながら語る――

『年頃ですから嫁の心配もありますが、二人とも弟が帰るまではと聞きましたから、まかせています』姉妹

は五、六町離れた畑に芋の掘り出しに汗をにじませて働いていた。

荒井さんのすぐ上の姉の菊枝さんは荒井さんに似て几帳面な性格らしく、話の途中で「こんなもんがあるんだよ」と五十年来大持つていて新聞の切り抜きをそつと差し出してくださった。何かの参考になればと菊枝さんなりに考えておられたようであった。

「どうして新聞に取り上げられることになったのですか」



小山菊枝さん宅で語りあう
3姉弟、左から愛子さん、賢次さん、菊枝さん

といふかる私にお二人は「憲兵が度々来ていて、その憲兵から話を聞いたといつて新聞記者が訪ねてきたんだよ」とおっしゃる。

私は銃後の美談もまた意図的につくられていった戦中というものに思いをめぐらさないわけにはいかない。

二・二六事件にかかわった息子、弟を持つ荒井家の人々にとって、銃後の美談として新聞に取り上げられるということは特別な意味を持つ。一本道（五日市街道）に添つて道の両側に家が並び、目をつぶつてさえもだれぞの家と言ひ当てる事のできる部落で、銃後の美談は二・二六事件の汚名挽回に十分な役割を果たす。

戦場と銃後でひたすらご奉公に励み頑張つた荒井賢次とその家族の姿こそ、軍国日本を支えた農村の一つの構図と言えないだろうか。

「孝女」とうたわれた姉愛子はその翌年の昭和十四年に、菊枝は十六年に結婚をする。

賢次は昭和十四年に除隊し、十六年再召集を受けマレーシア、タイなどの南方戦線に赴く。九死に一生を得、昭和二十二年に復員する。復員時の階級は曹長であつた。

三、「満州國」の警察官として生きた日々

「首相官邸で撃たれた弾の一部がまだ残つているんですよ」と右足の古傷をさすりながら増子さんはなおも言葉を続ける。「私は悪運が強いのかね。戦中戦後といつも危険の中に身を置き、死と隣り合わせて生きてきたのに、戦友や家族の者が皆死に、こうして私が元気に生きているとはねえ」と。増子さんがこの世の中の人間の意思の及ばぬことがあることを実感するのは二・二六事件とのかかわり以来のことである。



荒井さん宅で語りあう
増子さん（左）と荒井さん（右）

増子美忠は大正六年（一九一七年）三月二十二日、東京五反田で父己松、母サタの長男として生まれる。姉一人、弟一人の三人兄弟のちょうど真ん中であった。美忠の両親は茨城の出身で、早くに土地を離れ、東京五反田の駅前で不動産業を営んでいた。両親は長男である利発な美忠に特に目をかけ、将来は理工系の学校に進ませ、技術者の道を歩ませたいとひそかに夢を育てていた。子供には親の仕事とは違う堅実な道を歩ませたいと願う親心でもあった。

高等小学校を終えると美忠は親には内緒で文科系、それも当時の風潮からすると最も軟弱と言われた西洋音楽の学校、武蔵野音楽学校（現武蔵野音楽大学）に進む。楽器はトランペッタを選んだ。親には理工系の学校に行っていることにし、しばらくはばれることもなく毎日好きなトランペットを吹いて過ごした。しかし嘘で塗り固めた学校生活も破綻の時が訪れる。一年生ももうすぐ終わりという頃のことであつた。学校で禁止されていたダンスホールでのアルバイトが学校の知るところとなり、それがもとで退学处分を受けることになるのである。親には当然呼び出しがかかった。親を欺いて音楽の道へ進んだばかりか、学校の禁を破つて退学になるなど絶対に許せないことであった。期

待し、信頼していた息子に裏切られた両親の怒りはどうにも收まらなかつた。美忠は親のもとにいたたまれず、家の金五円を持ち出して大連にいた伯母を頼り満州に渡る。昭和八年（一九三三年）の夏のことである。

一九三一年九月十八日、奉天北部の柳条湖で満鉄の線路が爆破され、沿線の主な都市で一斉に軍事行動が起こり、戦時体制に入つた。満州事変の勃発である。それから半年後の一九三二年の三月、関東軍の手によつて「満州国」がつくられる。執政には清朝の廢帝溥儀が就任し、カイライ国が誕生した。増子が渡つた昭和八年の頃の満州は植民地特有の退廃的で剝離的な雰囲気があり、美忠の目にはそれは解放的で自由な天地と映るのであつた。美忠は日本での八方ふさがりの行き場のない気持ちをこの広い満州の地で思ふ存分發揮させた。

満州での生活も半年も経つてみると持つてきたお金も底をつけ、やむなく再び日本に戻つてくる。日本に戻つたものの、これといってやるあてもなく、またいすれば軍隊に入ると思うと早い方がいいと判断、十八歳になつたばかりの昭和十年、徴兵検査を受け、翌年の十一年一月十日、志願兵として陸軍歩兵第一連隊機関銃隊第七分隊に入隊する。

東京生まれで、志半ばとはいえ音楽の道に進み、満州に渡つて「自由な天地」を見てきた美忠にとって、軍隊の規律は余りに厳しくつらいものであった。大した理由もなく一等兵や上等兵に殴られるのも口惜しかつた。

こんなこともあつた。古年兵に軍人勅諭に仮名をふつてくれと頼まれた。命令と思い、言われるままに仮名をふつて渡した。その夜のことである。その古年兵はいきなり初年兵全員を集め整列をさせると、一人一人に軍人勅諭を暗唱せよと命令した。途中でつつかえた者には物すごい鉄拳が飛んだ。美忠も緊張のあまりつつかえてしまつた。すかさず両手ほどに鉄拳が飛ぶ。体が前後に揺れると、揺れたといつてはまた殴られるのである。全く割りの合わない話であつた。

二・二六事件が起きたのは美忠が入隊して一ヵ月半ばかりのことである。突入部隊として裏手から邸内に侵入、発砲して松尾予備役大佐や警察官を射殺したという理由で起訴された同じ初年兵、右田、関口、永井、島崎らと行動を共にしていた。むしろ美忠の方が常に先頭にいて現場付近を歩きまわり、弾を撃ちまくつていた程である。しかし負傷をして陸軍病院にかつぎ込まれた美忠は、病院で法務官や憲兵から取り調べを受けたほかは罪を問われることはなく、ただ病院内の接遇の変化によつて事件の経過と結果を知るのである。島崎らと美忠の運命を分けたものは一休何なのか、今となつては知る由もない。ただ運としか言いようのないものを感じるのみである。島崎正次、関口健司は判決から一週間後の七月二十日渡満し、北満の錯草溝で戦死する。

二月二十六日朝六時十分、病院にかつぎ込まれた美忠は、そこで「ご苦労さまでした」とねぎらいの言葉をかけられ丁寧に取り扱われる。朝食は一袋米と言われる銀シャリとお頭付きであった。昼食も一袋米であった。二十六日の夕食はいきなり三袋米の麦飯となり、二十七日は朝から面会謝絶となつてしまつた。二十八日は前日と変わらず、二十九日にははつきりと叛乱軍となつたことを知る。病院側の待遇は一変した。

三月一日には病院に法務官が来て取り調べが始まつた。取り調べの内容は事件当時の状況について「はい」とか「いいえ」と答えるだけの簡単なものであつた。初めに行動についていいと思うか悪いと思うかと聞かれた。美忠は「上官の命令でやつたことだからよくわからない」と答えた。

発砲についても、何時に、どこで、何発撃ったのかと聞かれたので、「六十発あつた帶革の弾の残りから見て三十発から四十発くらいは撃っています」と正直に答えた。法務官はそれには答えず、最後に「よし、お前は弾を撃つていいなかつたんだね」と念を押した。あまりに強圧的な言い方だったので、美忠は思わず反射的に「はい」と答えていた。法務官は「この後、だれが来て聞いても弾は撃たなかつたと答えるように」と言い残して取り調べを終えた。その日の夕方憲兵が来たが、法務官に言われたとおりに答えた。

二・二六事件に加わった下級兵士のうち十九名の者が起訴になつた。事件そのものの責任を問われたのは将校たちであつたが、何も知られずにただ命令によつてのみ行動した初年兵も直接の行動そのものを問われたのである。

美忠は四月に入つて陸軍熱海分院に移り、リハビリのための療養生活に入る。一ヶ月後自主退院し、五月八日編成替えをした歩兵第一連隊機関銃隊の一兵士として渡溝をする。任地は北満の泰安鎮であった。任務は抗日ゲリラの鎮圧である。この地で多くの戦友が死んだ。

昭和十四年一月、美忠は三年間の徴兵義務を終え除隊と

なる。除隊後も満州にとどまり、新京（長春）にあつた満州国的新京中央警察学校に入学する。日本に戻つても二・二六事件の「叛乱軍」に懐を広げて迎え入れてくれるところがあるとは思われなかつたし、「自由の天地」満州で一旗上げてみたいという気持ちもあつた。一年後の昭和十五年、満州国特務機関の警察官となる。昭和二十四年復員して日本の土を踏むまでの七年間、「中国人」として任務に就く。中国の山地を駆けめぐり、「匪賊」「馬賊」の討伐や掃討作戦を指揮した。中国名は「王」であつた。（匪賊というのは日本側からの呼称であつて、實際は抗日軍であつたり農民であつたりした）

中国人の部下を引き連れ、夜昼なく山中を歩きまわる任務は、極度の緊張を強いられるものであつた。

美忠が日本の敗戦を知るのは昭和二十年の八月二十日のことである。敗戦から五日後、八月八日のソ連参戦から十二日後のことである。八月二十日からは中国人の部下三百人を連れての逃避行となつた。部下には自分が日本人であることも、日本が負けたことも、敗走中であることも絶対に知られてはならなかつた。美忠が日本人であることを知っているのは、当菜^{ヲサイ}と言われるほんの二、三人の腹心の部

下だけである。日本人であると見破られないために、逃避行の途中、日本の糧秣倉庫を襲つたり、ソ連軍や紅軍と交戦してみたりした。それもこれも部下を欺くための策略であつた。普通の死に方はできないぞと心に決めていた。逃避行の途中、錦州の阜新飛行場で閻東軍が家族を飛行機に乗せて逃げるところや、戦闘機に火を放ち自爆するところを目撃した。その時美忠ははつきりと、自分の目で日本の敗戦を確認したのである。

山の中を歩きまわり、汽車を乗り継ぎ、襲い、野宿し、錦州市にたどりついたのは二ヵ月後の十月の半ば頃であった。三百人いた部下は三十人になっていた。美忠はそこで解除を言い渡し、美忠もまた一人のただの「中国人」となつて市中に潜伏する。

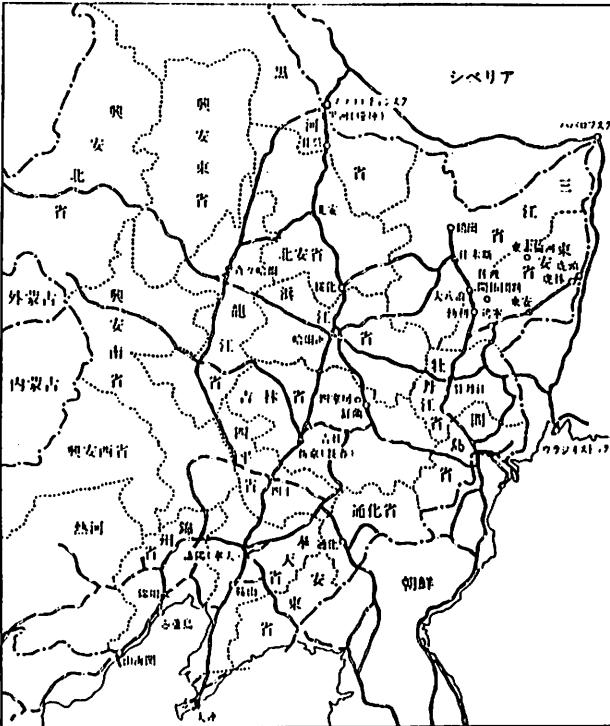
錦州市の街の中を歩いていた時のことである。突然「中国人」である自分を日本名の「増子」と呼ぶ者がいる。驚

いて顔を上げてみると、さらに驚くべきことに、目の前に立つて自分を呼びとめた者は、特務になつて間もなく、まだ「王」と名乗る前、抗日ゲリラの捕虜として捕らえ、一緒に何日も山の中を歩きまわつたことのある「朱」という男であった。「朱」というその男は知識、人格、風格、ど

の面から見ても並みの男ではない、「大人」と思われる雰囲気があり、人をひきつける何かを持ち合わせていた。美忠も次第に「朱」の人柄に引かれ、何とか助けてやりたいと思うようになつて行った。ある晩、他の者に気づかれないよう寝静まつた頃を見計らい、「再び日本人の前に姿をあらわすな」と逃がしたその捕虜だったのである。五年後に錦州の街中で再会するとは思いもかけないことであった。しかも朱は錦州市の市長であるという。美忠は思わず緊張した。敗戦国日本の特務という前身を知られるということは、死にもつながる危険を意味する。しかし朱は美忠に再会できたことを喜び、自由通行証を与えた。かつて一命を助けた朱に今度は自分が命を助けられる。ここでも美忠はただ運としかいいようなないものを感じるのである。

錦州には避難を求める南下してきた在満日本人があふれ、難民収容所で帰国の順番を待つていた。その中には中国で結婚した元従軍看護婦の妻と二人の子供がいた。「中国人」である美忠は妻や子らの前に名乗り出していくわけにはいかなかつた。時々日本軍の倉庫を襲い、得た日用雑貨や食糧を売りに行き、それとなく安否を確かめていた。収容所で

旧滿州概略図



の生活は言葉には言い尽くせない程悲惨をきわめた。生きるためには誇りも良心もかなぐり捨てなければならなかつた。ソ連兵による女狩り、栄養失調や伝染病による大量死、中国人による報復の虐殺や掠奪、日本人同士の殺りく、そして集団自決……。難民収容所の中の日本人、特に女、子供はまさに地獄を生きていたのである。「中国人」である美忠はそれを見てもどうしてやることもできなかつた。だた妻子の無事を祈るだけであつた。

昭和二十四年六月、収容所の日本人に帰国の順番がまわってきて、一ヶ月後の七月の船に乗船すると発表された。美忠はやつと妻子とともに日本に帰るとその日のくるのをじつと待つた。一ヶ月後帰国する日本人を乗せた引揚げ列車が錦州駅を出た。直前美忠はすでに動き始めた列車の最後部に飛び乗つた。列車は壱昌島埠頭に向かつた。壱昌島埠頭は帰国する日本人でごつた返し、人々は我先に船に乘ろうと殺氣だつていた。船が埠頭を離れる直前、船に飛び乗ろうとした美忠に、船の上から日本人が口々に「中国人は降りろ!」「ダメだ!」と怒鳴つた。その時美忠は初めて日本人であることを明かした。四日後佐世保の埠頭に降り立つた。日本の土を踏むのは、満州國の警察官になつ

たことを父母のもとに報告に来て以来七年ぶりのことであつた。

やつとの思いで日本に戻ってきたものの、東京は焼け野原、失業者や浮浪者が街にあふれ、引揚者の落ち着く場所などどこにもなかつた。五反田の生家は三月十日の空襲で跡形もなく焼かれ、父母や姉の行方も杳として知れなかつた。弟の智資は海南島で玉碎し、家族の中で生き残つたのは美忠ただ一人だけであつた。いつも死と隣り合わせで生きてきた自分が生きて日本に帰り、銃後の父母や姉が命を落とす。何とも皮肉な運命であると思う。

何もかも失い、また一からの出直しである。復員後一時期警察官を志したこともあるたが、その道に進むのはあきらめ、家族を養うために当座ヤミ屋をやつて食いつないだ。生きるために食へなければならないというギリギリの選択、それが戦後のスタートであつた。苦しい生活の中で中國で結婚した妻とも別れた。食べるためには次々と仕事も変えた。運送会社の運転手、生命保険会社の外交、商事会社、そして最後に明治生命の寮の管理人に落ち着く。日本に戻つて仕事に就いてから九番目の仕事であつた。一昨年、八年前勤めた管理人の仕事を退職し、二度目の妻ナラ子さん

と二人、西武線田無駅近くの三DKのアパートに静かに暮らす。

齢七十二歳、戦中も戦後もただひたすらに何かに向かつて走り続けてきた増子さんは、今やつと手にした「平穏」というものをしみじみとかみしめている。

四、むすび

これまで下級兵士の側から二・二六事件を見てきたが、むすびとしては、事件の背景や結果についても多少なりとも触れておきたい。

事件勃発から終結するまでの四日間、陸軍は派閥の思惑も絡んで收拾策をめぐり大揺れに揺れる。明治以来未曾の大惨劇と言われるこの事件で殺害された者九名、負傷者は重軽傷合せて八名にも及ぶ。その他物的損害、被害を挙げればきりがない程である。被害がこれ程までに明白であるにもかかわらず、終結までになぜ四日間もの日数を要したのか。この大惨劇を生む背景には何があつたのか。こ

れについては今さら述べるまでもなく、多くの方によつて解説されてきていることである。最近では二・二六事件の首席検事であつた勾坂春平氏の極秘メモが公開され、大臣告示や奉勅命令をめぐる謎に迫る新事実も書き加えられるようになつた。ただ当時陸軍内部に派閥の対立抗争があり、陸軍の根幹を揺るがす程に亀裂が深まつていたこと、また農村の慢性的疲弊に対し救済のための社会改革が求められていたこと、これらが国体明徴運動と結びつき、小さな事件を繰り返し、呼び水となつて最後は二・二六事件へと大きくなだれ込んでいくのである。

資本主義社会の露呈された矛盾を天皇親政のもとに軍部主導で解決しようとした彼らの行動は、天皇の名によつて打ち砕かれていく。

事件の收拾経過には謎が多く、その謎を解こうとすればする程、青年将校たちが陸軍首脳部の「スケーブゴート」になつていく過程が鮮明に見えてくる。

事件の收拾には手間取つたものの、事件関係者らへの処罰は迅速かつ極めて厳格なものであつた。しかも裁判は抗告なし、弁護人なし、公開なしのいわゆる暗黒裁判と言われるものである。裁く資格のない陸軍が陸軍内部の矛盾や

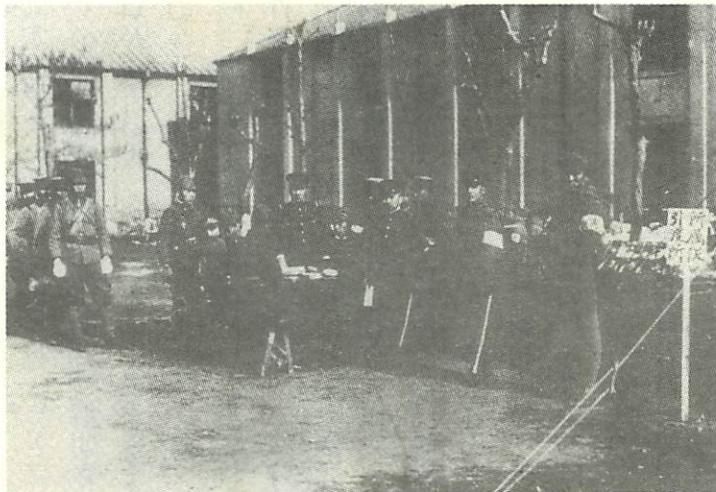
疑惑を覆い隠すために行われた裁判でもあつた。したがつて初めから公平な裁判は望みようもなかつたのである。この裁判によつて十三名の将校と二名の元将校、そして四名の民間人を含む十九名の者が死刑となつた。

約千四百名の兵を動員して起こされた二・二六事件は、その結末の悲劇性において、また日本が全面戦争になだれ込む転換点となつた意味において、また政治上の矛盾を一挙に露呈させた歴史的事件として多くの人々の注目を集めてきた。それらの多くは思想、信条、政治的立場からのものであり、下級兵士やその家族の置かれた立場や状況とは無縁なところで語られる場合が多い。

本人の意思とは関係なく事件にかかわらされ、事件の進展や経過さえ知らされることもなく、ただ結果だけをその身に引き受けさせられてきた初年兵たち……。彼らにその責任を問うのは余りにも酷である。

軍法会議で無罪になつたものの、歩兵上等兵倉友音吉以下十九名の兵士が裁判のために三ヶ月余り獄中で過ごし、厳しい審問を受ける。また原隊に戻つた兵士たちも兵営での厳しい取り調べと監視のもとに置かれ、嚴然とした差別を受けるのである。

事件から二ヵ月後の五月八日、彼らが渡つた満州の地は前線の中でも特に激戦地であつた。歩兵第一連隊機関銃隊二百七十名のうち一次渡満（召集解除まで）で戦死した者は十七名に及ぶ。（増子調べ）この中には軍法会議にかけられた四人の初年兵のうち二名が含まれている。



一人ひとり厳しい取り調べを受ける下士官・兵
— 岩波ブックレット — より

中でも悲惨だったのは安藤輝二大尉が中隊長を務め、最も団結の固かつた歩兵第三連隊である。渡満を前に歩兵第三連隊では後任の連隊長が「お前たちは事件に参加したのだから、渡満後は汚名挽回を目標に軍務に精励し、白骨となつて帰還せよ」と訓示したという。（岩波ブックレット、二・二六事件より）

下級兵士にとつての二・二六事件、それは命令を至上のものとする「軍隊組織」が抱え込む内部矛盾の産物……と言えないだろうか。

私の力に余る二・二六事件をどうにか書き終えることができたのは、荒井、増子両氏の温かい励ましと御協力によるものである。お二人は「二・二六事件の生き残りですよ。眞実を知る手がかりに何かお役に立てば」と、当時の新聞を初め、たくさんの著作や資料を惜しげもなく貸してください、お話を伺うばかりでなく、その面からのアドバイスもたくさんいただいた。

今年は「昭和」から「平政」に元号がかわり、政治的立場から二・二六事件が大きく取り上げられ、人々の事件に寄せる関心の深さを改めて知らされたようだ。天皇

制」「軍部ファッショ」「戦争拡大」とこの事件は政治上の多くの問題点を内包し、いまだに解明されていない部分が多いからであろう。それだけに書き終えた今でもこれでいいのかと一抹の不安が心をよぎってしまうのである。

今回二・二六事件に初年兵としてかかわった人の立場か

ら事件を追つてみたものの、家族の方や身内の方からの証言が十分得られなかつたことはとても残念なことであつた。もうすでに鬼籍に入られた方もおられて、「もう少し早くかつたら」と悔やまれてならなかつた。砂川出身で二・二六事件にかかわつた方のお一人、清水晋氏もそうであつた。一昨年亡くなられたという。昭和十一年五月の渡溝で實句に赴き、右肩に弾を受け傷病兵となつて帰還された方である。

事件終結から判決の出る七月五日までの三カ月間、獄中体験をされたK・I氏は、事件から五十三年たつた今でもそのことを妻以外、子や孫にも打ち明けてはいないといふ。過去を胸に秘めてきた年月はそのまま二・二六事件の根の深さを物語つている。

また、「満州」のことについては中国の民衆の側から同

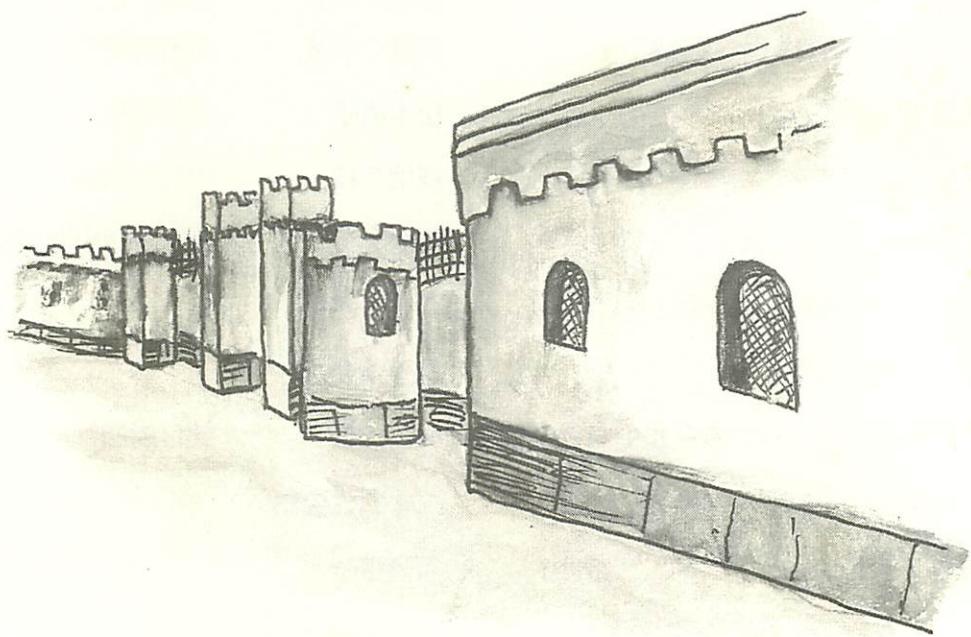
じ状況がどう見えたのか追求できなかつたこと、個人的体験が単なる懐古趣味に終わつたのではないかと、掘り下げの甘さを痛感するばかりである。個人的体験が懐古趣味に終わつてゐる限り、普遍性を持つことができないとと思うからである。

事件にかかわり、戦争体験を持つ方は「語れない」「語らない」ことをもつともつとたくさん持つておられることが多い。私が知り得たと思っていることもほんの一端かもしれない。語らないということの中にこそある「眞実」を、読み取る豊かな感受性を持ち合わせたいものと、つくづく思われた一年であつた。
(文中敬称略)

吉沢 工ミ

参考文献・参考資料

「二・二六事件」	高橋正衛著	中公新書
「二・二六事件獄中手記遺言」	河野 司著	河出書房新社
「昭和史発掘」	松本清張	文芸春秋
「妻たちの二・二六事件」	澤地久枝	中央公論社
「雪はよごれていた」	澤地久枝	日本放送出版協会
「二・二六事件と郷土兵」	埼玉県発行	
「雪未だ降りやまず」	埼玉県発行	
「大河流れゆく－アムール史想行－」	林 郁	朝日新聞社
「初年兵の手記」	二・二六会編	
岩波ブックレット「二・二六事件」	須崎慎一	



53年前の歩兵第一連隊本部の外壁（増子氏筆による）

立川飛行場

と
女
た
ち

戦前・戦中・戦後
き共に生きて

立川飛行場

大正十一年立川村原市場に飛行場が建設され飛行第五大陸着任。これは近代戦として航空力の増強と帝都防衛の重要性を第一次世界大戦に学んだ結果とされている。

桑畑と雜木林が広がる平坦な土地は、後の拡張の容易なことも予想させ、明治二年に開通した甲武鉄道が都心との連絡、輸送を短時間に保障するという好条件を備えていた。民家二戸と避病院の立ちのき、桑畑や小作地（農地）を手放すなど当事者にとって深刻な問題も、「お国のために」のかけ声にかかり消されてしまったようである。

二年後の関東大震災にはここから飛び立たせた飛行機により都内一円にビルをまくことによって「民心安定」をはかるなどアピールに余念がない。破壊した飛行場の復興を待てない民間航空の移転を反切りに、新聞社、飛行学校、航空輸送などが西地区を中心に立川に集中したが、平行して事故の発生も増加し、ついには昭和十五年日野市内に墜落し住民を死に到らしめるまでになつた。これは昭和八年に民間機が立川を去つて軍が占有していた時期、敗戦後「原住民立入禁止」と掲示されて米軍に占領された時代、ようやくにして去つた米軍の後に強行移転して来た自衛隊の占拠の現在を通して、住民が持たされて来た「明日は我が身」の恐怖感が現実化したものである。

一方婦人と子ども達は歓送迎会などのイベントに組織的に動員され「軍都立川」を支える力としての意識を育てていく。昭和八年の天皇行幸には愛国婦人会がユニホームを新調し飛行場へくり出した。

陸軍航空技術研究所、陸軍航空技術学校、陸年少年飛行学校……、立川飛行場とその関連施設によって数多くの技術が開発され、物が作られ技術を身につけた人間が育てられたが、それらは全て戦争に勝つための手段としてでしかない。

基地に追わられて

中里の集団移転ノート

ベトナムの二度の戦役を機に見るみる膨れ上がり、世界に冠たる「ヨコタ」に育つていく過程は、見事というより薄気味悪さすら感じさせる。

一、ヨコタ

立川には二つの基地がある。一つは立川基地であり、他の一つは立川の西北部に位置する横田基地がそれである。

立川基地が市の中心部にあって、その動静が、良くも悪くもすぐに立川の町にさまざまな影響を及ぼしたのにひきかえ、同じ立川の地でも西北の田園地帯に広がる横田基地については、意外と知られていないことが多いのではなかろうか。横田基地が立川の人々、とりわけ隣接する中里の人々の生活どのように結びついていたのか、今回は中里の人々の集団移転の話を中心に探ってみたいと思う。

横田基地は現在、福生市、立川市、昭島市、武蔵村山市、羽村町、瑞穂町の四市二町にまたがり、総面積も七百十三万六千百六平方メートルに及ぶ、米軍極東戦略上の最重要基地である。武藏野台地の一角に出現した立川基地の付属飛行場が、首府に近く、また用地買収が容易であったなどの理由から、第二次大戦後、米軍に接收され、朝鮮、



図 I 立川市の二つの基地（立川・中里）

二、横田基地の変遷

横田基地の前身、福生飛行場が完成するのは、日米開戦を一年後に控えた一九四〇年（昭和十五年）のことである。

その前年七月に、福生村及び箱根ヶ崎外三カ村組合の土地所有者をそれぞれ集めて、軍関係者による用地買収交渉が行われたが、経済効率の悪い山林であつたこと、不景気、また用地のあらかたが土地の有力所有者のものであつたことなどから、買収は簡単に済んだ。（立川愛雄「みずくらいど六」より）すぐに工事は開始され、浅沼組が工事請負会社となつた。工事現場には、強制連行された朝鮮人もたくさん働かされていた。また、赤やだんだら縞の着物を着せられた囚人たちも、この工事に多く狩り出されていたことを、今でも中里の人々は鮮明に記憶している。

こうして福生飛行場、正式には「多摩陸軍飛行場」が、工事着工後わずか数カ月で開設されたのである。滑走路の長さは一千三百メートルに過ぎず、全体の広さも四百四十六万平方メートルで、現在の約半分であつた。飛行場の南方を五日市街道が横切り、その北側に飛行場、陸軍航空学校、陸軍航空審査部が設置され、またその南側には熊川倉庫と呼ばれる貯蔵庫が置かれていた。飛行場は主に新鋭機

や試作機のテスト飛行に使われていたが、空襲が激しくなると、福生の山林や玉川上水あたりに、落ち葉をかけたりした軍の飛行機が幾体も隠されていたという。

この立川の付属飛行場を米軍が接收するのは、一九四五年（昭和二十年）九月六日のことであつた。後々の使用を考え、あれほどひどかつた立川空襲の折にも、飛行場内には何ら損傷を与えることがなかつたという周到振りであった。米軍は、翌二十二年、北多摩郡村山町（現武藏村山市）内の一地名をとつて、この飛行場を横田基地と命名した。「ヨコタ・ベース」の始まりである。

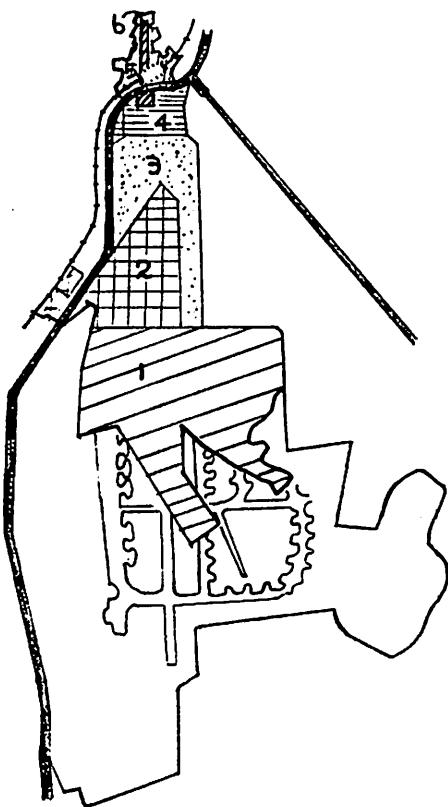
三、拡張につぐ拡張

占領後の横田基地の歴史は、占領直後の強制接収を手始めに、たび重なる拡張と、アジアでの血なまぐさい戦争への出撃によつて彩られている。

横田基地の第一期拡張は、接收直後から一九四七年にかけて、計七十五万平方メートルについて行われた強制執行であり、立川の中里部落でも、五日市街道西端の四軒が立ち退きを命ぜられている。

次の大きな拡張の波は、一九五四年三月、米軍が政府に、立川、横田、木更津、新潟、伊丹の各空軍基地の拡張を要求したことによって端を発して起つてゐる。これは米軍機の大型化とジェット化を理由とした米軍の拡張要求であつたが、政府は伊丹を除き、それを小牧に変えて、五五年四月、米軍要求に応じていつた。このため、立川基地拡張予定地とされた砂川町では「町ぐるみ」の基地拡張闘争が細まるることになつたが、すぐ隣の横田基地では「静かな拡張」が進められ、主に瑞穂町方面に基地が伸びていつたのである。

この拡張により、横田基地はほぼ現在の規模を持つに至り、主滑走路も三千五十メートルとなつた。これによつて、あらゆる大型機、戦闘機の離発着が可能となつたのである。その後、滑走路はさらに延長されて、三千八百七十メートル（オーバーラン部分を含む）の偉容を誇るようになるのである。大型ジェット機が本格的に飛来するようになつたのは一九六五年七月ごろからで、それはベトナム戦争激化に伴い北爆が開始された時期と軌を一にする。横田基地はこのころから従来の戦闘機による出撃基地、訓練基地としての性格を維持しながら、次第に輸送、兵站基地としての色彩を強めて、巨大な総合基地となつていつた。



番号	面積m ²	備考
1	957,499	昭和14年から昭和19年 陸軍省買収、基地として提供
2	385,651	昭和29年から昭和38年 買収、在日米軍基地として提供
3	380,780	昭和31年買収 基地として提供
4	101,192	昭和32年から昭和40年 買収、基地として提供
5	134,259	国有地
6	18,522	昭和36年買収、アプローチライト用地として 買収
	1,977,903	このほかに基地内道路 分 336,319 m ²

瑞穂町提供分（瑞穂町史より）
図II 瑞穂側への基地拡張状況

この傾向は、関東地区の米軍施設を横田基地に統合する関東計画が、一九七二年、サンクレメンテ日米首脳会議から帰国した福田外相により公表され実施されるに従い、一層強まつた。この計画により、府中空軍施設、キャンプ朝霞、立川基地、関東村住宅地区、水戸射撃場の一部など、すべてが横田に集約された。この計画はベトナム戦争でドルを乱費したアメリカのドル防衛策とも言われているが、七四年十一月には在日米軍司令部と日韓空域をカバーする第五空軍司令部が横田に設置され、横田は名実ともに極東米軍基地の中核と位置づけられることになった。朝鮮、ベトナムの二つの戦火とヨコタ・ベースの拡張が、常に連動して進められてきたことを考え合わせると、その拡張が土地の所有者だけの問題にとどまらず、いかにアジアの人々の運命と深く切り結んできたかに思いをいたさないわけにはいかない。

四、中里部落と移転

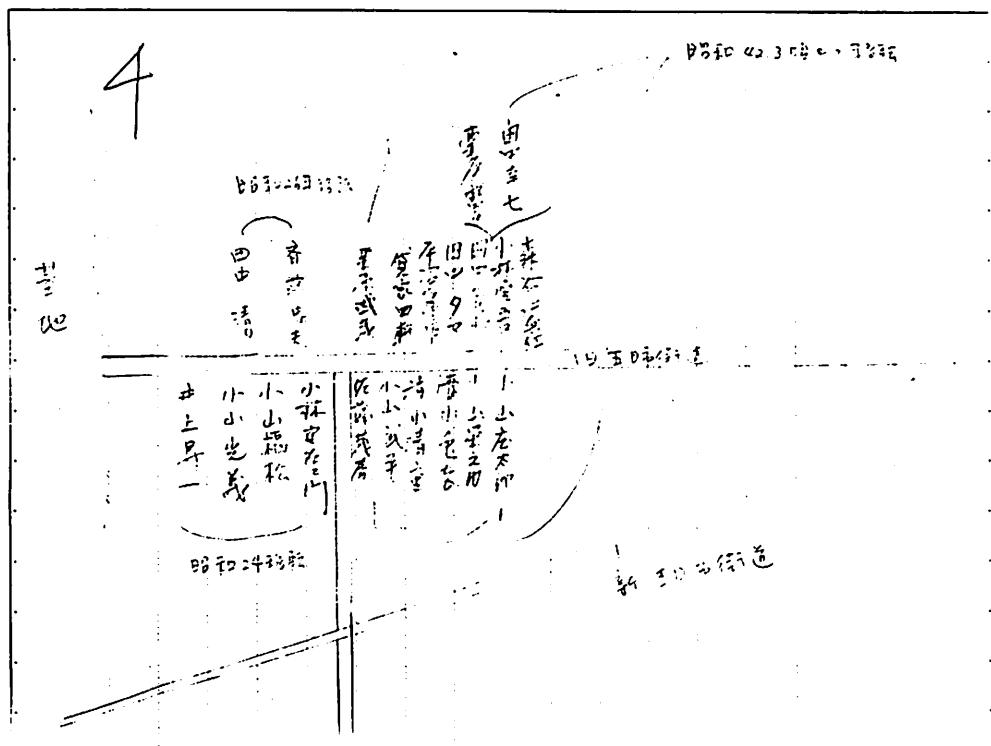
中里は、現在の立川の行政区分からは西砂町の一角に当たる。新旧二つの五日市街道沿いに大きな門構えの家が点

在し、広々とした畠地と雑木林が広がっている。その西端は緩衝地帯としての緑地帯を挟んで、金網のフェンスが張りめぐらされた基地が境界を接している。

この中里の大動脈である五日市街道は、旧道が基地内に取り込まれ、基地に沿つて南下する形で新道が建設されている。この五日市街道について、地元の市会議員清水庄平氏は、米軍占領とともに通行止めになり、朝鮮戦争が始まつたころに迂回路、現在の新道ができるのではないかといふ。それまで五日市街道を中心とした中里の人々にとって、立川は遠い町、牛浜が最も近い停車場だったのである。

中里部落の移転は、図四に示すように、三つの時期に行われた。第一は米軍占領直後の強制接收時。第二は一九五一年（昭和二十六年）十一月、滑走路直下の田中清志方の裏の畠にB29が離陸に失敗して突っ込んだ事故を契機として移転を余儀なくされたときであり、最後は一九六七、八年（昭和四十二、三年）ころで、残った基地近隣の十五世帯が、それこそ櫛の歯が欠けるように、一軒、また一軒と中里の他地域に移転していく。集団移転時である。このとき防衛庁によつて買収された土地は約十五万六千平方メートルであり、それは一九七三年から具体化する関東計画に向けての強力な布石となつたのである。その重要性は、

図III 移転前の中里部落



一九七〇年一月五日付の防衛施設広報に右のように記載されている。

完了した。

横田飛行場は、本邦中央部においては、三千メートル級の滑走路を有する唯一の米軍飛行場であるが、その南端部分は滑走路東側に立川市砂川地区・中里部落が所在するため、滑走路に人家が接近し、かつ滑走路に並行して立川市道八一八号線（旧五日市街道）が走っている状況であつたため、航空機の離着陸に障害があり、三千メートル級の滑走路を有するにもかかわらず大飛行場としての機能を十分に發揮し得ないばかりか、附近住民の安全という見地からも、極めて憂慮される状態にあつた。

これらの『航空障害を除去し、附近住民の安全確保』という見地から、日米間で協議された結果、昭和三十年七月十一日（要求面積三万五千四百四平方メートル）及び昭和四十年十一月十二日（要求面積十万六千八百四十三平方メートル）の二回に分けて米側から航空障害を排除するための地域に障害物制限区域設定について要求（総面積十四万二千二百三十八平方メートル

ル）がなされた。

当庁は昭和三十五年度から当該地区の継続買収にかかり、本年（昭和四十四年）十二月の買収を最後に、九年の歳月と十億円余の資金を投じ面積的には立川市飛行場北側区域にほぼ匹敵する約十五万六千平方メートルの土地買収及び同区域の関係世帯十七戸の移転も完了、当該区域の買収等は、事実上ここに終了した。

前述のように、横田飛行場は、わが国に所在する米軍飛行場としては最大級のもので、立川飛行場の飛行活動の終結ということと相俟つて、今後ますます重要な機能を果たさなければならない施設であるだけに、この区域の買収完了は必要な意義を持つであろう。

なお、立川市道八一八号線（旧五日市街道）の附替等の終り次第、この区域の提供が速やかに終了するよう、現在事務手続が続けられており、近く全面提供が行われる予定である。」

（佐藤昌一郎「地方自治体と軍事基地」より）

こうして中里部落の集団移転により滑走路は十全な使用が確保されることになつたが、買収地の中に市道が残存していたため、防衛庁は、一九七〇年、買収地の一部を米軍に十六ゲート用地として新規に提供したほか、残りの買収

地をなかなか基地に提供できなかつた。防衛庁は市道を廃道にすることを画策し、当時立川市長であつた阿部行蔵に、市道を廃道にし、買収済みの土地の東側に百分百國庫負担で市道（周辺道路）をつくることを申し入れてきた。しかし、阿部市長は、市道の廃道は基地拡張の立場につながるとの立場に立つて反対し、新道の建設は基地損害の補償という形で実施すべきであると回答するのである。

こうして一度は見送られた廃道問題も、阿部市長が岸中市長に交替するや、再度新道着工の話し合いが進められ実施されるに至るのである。中里の集団移転がもたらした波紋は、意外なほどに大きかつたのである。

五、静かな移転——清水庄平氏の聞き書きから

「中里は、元々は秋川の草花あたりから流れてきた人々によつて拓かれた土地だつたんですよ。そのまた先をたどれば、五日市の山奥・養沢あたりの平家の落人たちの後裔でしそう。それで、このあたりはかつて草花と呼ばれていたこともあるのですよ」

私が秋川の草花の人間だと知つて、清水氏はこんなふう

な話から始めてくれた。清水庄平氏は昭和二十年生まれの四十三歳。中里に代々居を構え、現在市の若手議員として活躍している。中里の移転について知りたいと思ったときに、あの人ならと氏を紹介してくれる人があつたのである。清水氏の父亀吉は、昭和四十二、三年ごろの集団移転の際、中里のまとめ役を果たしていたのである。

「しかし、その後、羽村の中里に住んでいた人たちがこちらに移ってきてね。どうやらその人たちの勢力の方が強くなつたようで、現在『中里』と名づけられているんです。その証拠に、この中里の神社は神明社というのですがね。これも羽村の神明社から御神体を分けてもらつたものです。もともとの神社も、境内が基地に吸収されて、現在は違った場所に移つてますね」

「強制接收で、ですか？」

「いえ、土地を貸してあるのです。今でも地代を取つているのです。基地の中にも、結構こうした民有地が残つていましてね。みんな地代を取つて貸しているんです」

ここで清水は前出の図Ⅲの地図を出してきた。そこには移転前の中里の家の地図が示されていたのである。

「この地図でわかるように、拡張前の基地は現在の西側エプロンあたりまでで、滑走路の南端はまだ五日市街道に

かかつていなかつた。それどころか、滑走路の南端と街道の間に民家もありました。それが、この田中、齊藤の両家です。米軍がやってきて、一番最初に移転させられるのは、五日市街道の南側で基地に近かつた小山光義、井上昇一、小山福松、小林安左エ門の四軒でした。なにしろ占領直後の強制接收だったので、補償もほんの涙金だつたと思いますね」

清水は経済的にこの四軒の移転が最も大変だつたのではないかと氣の毒そうに口にした。この強制接收で立ち退きを命ぜられた四軒のうち、井上、小山の両家は、移転先が基地の危険地帯に入り、昭和四十九年、中里の集団移転のしんがりを務めて、また居を移している。二度目の移転である。

「次は五日市街道の北側の二軒でした。昭和二十六年、B29が田中さんの家に突っ込みましてね。その後積んでいた爆弾がはねて、近隣の家々にまで飛び火し、大変な騒ぎとなりました。そのとき焼け出された田中さんと齊藤さんがこのとき移転したのです」

当時六歳だった清水は、田中の家が柱ばかりになつて炎上していた様を、今も強烈に記憶している。基地近くの生活は、常にこうした事故の危険性と隣り合わせているのだ。

そして昭和四十二、三年ころの第三次の集団移転の時期がやつてくる。

「移転の話が防衛庁から出されたのが四十二年ころで、私は実は当時学生運動の方に忙しくて、余りこの問題については知らないんですよ。防衛庁は、このあたりは危険地帯に入っているから移転してもらいたいと言つてきたのですが、本当のところは滑走路の東側にもう一本滑走路をつくるのがねらいではないかというもっぱらのうわさでしたね。このときの補償は時価でしたが、今と違つて中里の畠地の地価なんて知れていましたから、大した額ではなかつたと思います。大体のうちは、そのお金で中里に適当な代替地を見つけて移り住んだのですが、栗原さんだけは遠くに引っ越されました。自分の土地に移転できたというのは、うちだけでしたね」

当時の地価は低く、とても先祖伝来の家や畠を手放す代價に見合う額ではなかった。にもかかわらず、防衛庁の申し出に応じていくのは、時代の流れや中里なりの事情があつたからであろう。

「時代の流れ」、中里の集団移転当時の周囲の様子を知るために、一九六七、八年（昭和四十二、三年）ころ、昭島市堀向でも同様な集団移転がより大規模におし進められていた事實を見ておきたいと思う。

この堀向の集団移転については、澤未知子著「基地騒音に失われた街」、及び昭和四十七年三月昭島市発行の「基地とあきしま」等に詳しく記録が残されている。この集団移転もまた基地が近くにあつたが故の悲劇であり、中里の移転と同様、心ならずも後の「関東計画」への布石となるのである。堀向の地は青梅線昭島駅から横田基地に至る一帯を指し、現在は跡地に植林された木々が青々と葉を茂らせ、かつて一時は八百世帯もの人々が生活を営んでいた地であつたとは想像すらできない。

堀向は、昭和飛行機の社宅地区として発展してきた街だつた。本村だつた拝島村から見れば、上水を越えた向こう岸にあります「堀向」の地であった。昭和飛行機の隆盛とともに、堀向は昭島で有数の繁華な街へ発展していった。しかし、この地の悲劇はひとえにそれが横田基地の滑走路直下にあつたというところにある。朝鮮、ベトナムとアジ

六、ゴーストタウン

アに火の手が上がるたびに、基地から飛び立つ飛行機は激増し、それとともに騒音も激化した。耐え切れなくなつた住民たちが、初めて市議会に「騒音の低下」、「防音工事」を訴えて請願を提出したのは、一九六〇年（昭和三十五年）のことであった。このとき、この請願に加えて、もしこれらの要望が入れられないときは、堀向地区の集団移転の補償をなすようにと条件を付したのである。しかし、これに對して防衛庁が取り上げたのは、住民の本心とは思われないこの条件の方であつた。こうして堀向地区住民の初めての請願は思いもかけない方向に展開していった。一九六七年（昭和四十二年）に、国と住民の間で一戸当たり平均百萬一千円の補償額が決まる。堀向の集団移転は一応の決着を見るのである。しかしその間、国会への陳情、昭島市を交えての話し合いが幾度となく繰り返されたのである。

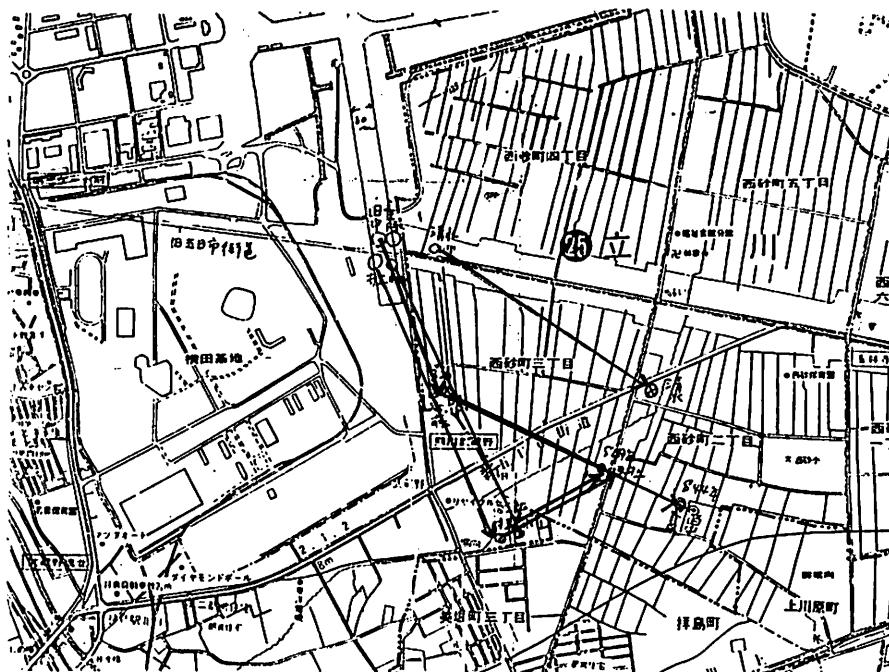
現在、堀向地区の人々は、昭島市が市内東の岡に造成した代替住宅に主に移転している。かくて最盛時には八百余世帯の人々が暮らした街が、そのうち五百三十六世帯が移転し、完全にゴーストタウンと化したのである。跡地について、国は基地拡張のためには使用しないことを約束しながら、一九七三年（昭和四十八年）、「計器着陸用施設の

一部である」として、ミドルマーカー（中間誘導信号所）の設置を、昭島市や住民の反対を押し切つて強行している。中里の人々に防衛施設から移転話が出されるのは、堀向の人々の移転反対交渉が妥結する六七年（昭和四十二年）である。そして、すぐに堀向の人たちの移転は慌ただしく進んでいく。同じころアジアではベトナムの戦火が激化の一途をたどっていくのである。

七、「移転」と女の暮らし

井上セウさんの聞き書きから

「基地のために移転させられる」ことが果たして女にもたらすものは何なのだろう。とりわけ生活する手だけが土地そのものであつた農家の主婦にとって、移転を余儀なくされるという事態は、何を意味しているのだろうか。その辺の話が聞きたくて、現在も中里で養蚕を営む井上セウさんを訪ねた。セウさんは一九一八年（大正七年）生まれの七十二歳。この「つむぐ」一号においても、吉沢エミが養蚕農家の主婦としての生活を聞き書きしている。図IVを見てほしい。ここには今回話を聞いた清水、井上、また次章



図VI 二度の移転 一 井上、小山、田中、斎藤の例より

で話を聞く田中達の移転状況を現在の地図の上に重ね合わせたものである。この図でわかるように、井上家も二度の移転を余儀なくされている。

「井上家は中里の一畠基地寄りの家でした。その井上の家が私の実家の親戚筋に当たりましてね。従兄弟の界一に嫁いだのは昭和二十二年、私が二十九歳のときでした。そして間もなく家の敷地に対して接收令状がきたのです。あれは私が嫁いだ翌年、二十三年のことでしたよ。反対するもなんも、有無を言わせぬ強制的なものでした。補償なんて一銭もありませんでしたね。ずっと後になつて、防衛庁から涙金がきましたけど。ですから、大変ですよ。新しい移転先の土地を工面するのに、手持ちの山林を処分しました。そのとき移転させられたのは四軒でしたね。（図IV参照）うちちは隣の小山さんと堀向の裏の山林に土地を買って一緒に移転しました。残りの二軒も、中里の親戚筋の土地を買って移っていきましたよ」

一町歩もあつたよく肥えた地所を明け渡し、一週間以上かかつて家を引き、飼っていたにわとりや豚を追いながらの移動でたどりついた先は、しかしまだ人の手が入っていない雑木林であった。

「他所にまだ畑があつたから、何とか生活できましたけ

ど、山を切り開いていい畑にするには五年や六年はかかります。今のように機械があるわけじゃないし、みな手でやつたですね」

山の木を切り倒し、根っこを掘り起こす。鍬を入れ、土をふるう。開拓作業の一切が若いセウ夫妻の肩に担われたのである。その中で三人の子供を育て、にわとりを飼い、糞糞も人並みにやってのけたのである。

「子供は、そう、おばあちゃんに預け放しでした。一番大変だったのは水くみで、五日市街道の裏にあった共同井戸までくみにいくのですが、時間がなくて昼休みに行ったりしてました。そのうち、あれは昭和三十年ごろでしたか、基地のガソリンが井戸に流れ込んで井戸が使えなくなったりしてましたね。あのときはうれしかったです」

ようやく城向での生活が軌道に乗りかけたころ、井上、小山の両軒にも再び防衛庁から移転してはどうかとの話が持ちかけられる。防衛庁が指定した危険地帯に入っているというのだ。井上、小山の二軒は、その申し出を最終的に受け入れた。

「初めはそうでもなかつたのですが、朝鮮戦争のころからあのあたりは飛行機の音がやかましくなってね。それに

前にいた中里の家の近くにB29が落ちたことがあって、今度またいつ落ちるかといつもびくびくしていました。そんなこんなで小山さんと相談し、移転することに決めたのです。昔いた中里の人たちもどんどん移転していましたしね。こちらに来たのは昭和四十九年の正月でした。中里の移転組の最後でした」

終始笑顔で控えめに話すセウさんが、それでも強制移転の補償の件についてだけは、強い口調で否定されたのが、私にはとても印象的であつた。

八、B29が家の裏に飛び込んだ〃

田中清志氏の聞き書きから

一九五一年（昭和二十六年）、中里の地にB29が墜落し、付近の家屋百十一戸が被害を受けた事件を機に、移転を余儀なくされた人たちの中から、私は田中清志氏を訪ねた。田中氏は、B29墜落事件の折、自分の家の敷地に飛行機が飛び込んだ「当の」被害者であった。田中も井上同様、一九六九年（昭和四十四年）、新しい移転先が再び危険地域に入ったとして、一度目の移転を決意している。

「昔、まだ中里に基地が拡張されていないとき、飛行場のすぐ脇に神社があつて、その隣がうちの地所で、八百坪くらいもありました。間口は六十メートルから七十メートル。えエ、昔の家ですから、広かつたですね。うちの隣が斎藤さんで、やはり間口が七十メートルくらいあります。その間がちょうど滑走路の延長上に当たりましてね。家から基地まで七十メートルくらいだつたか、百メートルはなかつたと思いますが、そのくらいのところにバラ線が張られていて、すぐ滑走路になつていました」

占領当初はそれほどでもなかつたが、一九五〇年（昭和二十五年）六月二十五日、朝鮮戦争の火ぶたが切つて落とされると、状況は一変した。北鮮に向かう爆撃機（B29）がずらりと並び、ブルドーザーのような運搬車が次々と飛行機に爆弾を積み込んでいく。飛行機が飛び立つのは、戦争開始当初は朝八時ごろであつた。が、戦火が激しさを増すにつれ、夜間爆撃が主体となり、夕方出発して朝帰つてくるパターンとなつていつた。あの日、田中の家に落ちたB29もそうであつた。

「今ではつきり覚えていますよ。あれは昭和二十六年十一月十八日の夕方六時ころでした。当時、私は十七歳で、あのときは居間で新聞を読んでいました。御存じかもしれ

ませんが、飛行機というのは風に向かつて滑走するものでね。夏ならば南に向かつてくるし、冬なら北に向かつて飛んでいくのです。しかし、いざれにしろ爆弾を手いっぱい積んでいるのですから、滑走路のぎりぎりまで上ろうとしませんでした。前々から危ないとは思つていたのですが……。事件のあつた日は十一日で、いつものように夕方、飛行機が次々と北に滑走して飛び立つていく音がしましたと、一機だけ南に向かつてくるのがいる。『変だなア』と思つてゐるうちに、キツキツキーという高い音がして、数秒後に何とも言えない金属音がしたのです。これは何かあつたなと思つて裏へ飛び出すと、離陸しそこねたB29が、滑走路の先端部分に胴体をつっかけて、前にのめるような形で裏の畑に突っ込んでいましてね。その有様は、クジラが後ろから火を噴いているようだつたね」

事故機はいつたん北に向かつて滑走したものの、上がりきらず、再度南に滑走し直して、滑走路の先端部分に胴体を引っ掛けたものらしい。田中は事故直後、二人のアメリカ兵が、飛行機から、後を振り返りながら近くの基地の排水池まで駆けていくのを目撃している。数分の後、積載していた爆弾が次々に炸裂し、付近の家屋に飛び火した。そのときの被害家屋は百十一戸にも及んだ。へ「東京・横田

基地」連合出版) 幸い田中は家族とともに家の脇にあつた土蔵の陰に逃れ、九死に一生を得た。

「あのとき、日本人の消防隊がすぐに基地からやってきてね。着いた直後に爆弾がはねたんです。十人くらいも亡くなつたんじゃないですかね。かわいそうでしたよ。もう戦争が始まつて一年半くらい経つたときでしたから、人もB29も疲れていたんでしょうね。その翌年の二月七日、またB29が金子の高架線に引っ掛けたて墜落する事故がありました。あのときは雪の多い年で、私の親戚が金子にあるものですから、雪の降る中、見舞いにいきましたよ。こちらの事故のときにはきてもらつていきましたからね」

わずか二、三ヶ月の間に、田中の身辺で二度のB29墜落事件が起つたことになる。

その年の寒い冬を、田中たちは同じく焼け出された齊藤、平沼両家の家族とともに、井上ら四軒が立ち退いた跡の空き地にテントを張つてもらつてどうにか凌いだ。土の上に板が敷かれたばかりのテント生活は、今の者ならどうてい耐えられない厳しいものだつたらしい。翌年四月、ようやくでき上がつた新居に、田中、齊藤の二軒は越していった。その事故の補償は百万ほどだつたという。現在、田中らが立ち退いた跡地には、滑走路が当然のように延長されてい

る。田中、齊藤の二軒は、一九六九年(昭和四十四年)、防衛庁の求めに応じて、再度現在の地に居を移している。(図IV参照) そのときの補償は、土地代は坪三万くらいで、家屋はただ同然だつたと、田中は当時のことを思い出して話してくれた。

九、まとめとして

幾人かの証言をたよりに中里の集団移転の跡をたどつてきた。私が今回このテーマを取り上げたのは、中里や堀向の集団移転について何も知らなかつたからである。基地の一部とは言え、その地が以前は人々のささやかな生活の場であつたことに衝撃を受けたからである。

周知のようすに、基地は日米安全保障条約、その他多くの法律、条例等によって支えられている。その正当性については、それぞれ意見の分かれるところであろう。今回、取材に応じてくれた清水氏は、

「現在の世界の東西バランスは防衛力によつて保たれてゐるのは現実のことです。また日米安保条約によつて今日の日本の繁栄が成し遂げられたことも、また否定のできな

い事実です」との見解を寄せてくださった。

一方、基地に反対の立場に立つ人々もいる。去る三月十五日、東京地裁八王子支部で判決が出された横田基地騒音訴訟の人々もその一部であろう。しかし、騒音訴訟は基地そのものの是非を争点としていない。純粹に基地運用が周辺住民に与える違法性から、夜間飛行の差し止め、損害賠償を求めた訴訟である。結果は、残念ながら補償についてのみ認めるというものであった。また、基地存在そのものに反対し、今でも横田基地を監視し続けている人々もいる。

中里の地に限つても、五十一年、中里に新ゲート設置の動きがあつたとき、立川・中里自治会は抗議し、反対運動が展開された記録がある。このときは中里自治会子供会のキャンプで住民不在のときを見計らつて、ゲート開門工事は強行された。

私は、これら基地と周辺地域が好むと好まざるとにかかわらず抱え込まさるを得なかつた事実の一つ一つを大切にしたいと思う。そして、それを記して明日に継ぐことが、「基地の街」立川に住む住民のつとめのような気がするのである。そういう意味からも、今回のこの中里の集団移転の話も、当時の人々の思いも含めて、私たちは断じて風化させてはならないと思うのである。

今回のノートを作成するに当たつて、いろいろな方の著作から多くを学びました。主なものを記して、お礼申し上げます。

「東京・横田基地」

「東京・横田基地」編集委員

会編、連合出版

「地方自治体と軍事基地」

佐藤昌一郎、新日本出版社

「基地騒音に消えた街」

澤 未知子、陽光出版

「基地とあきしま」

昭島市

「統基地とあきしま」

昭島市

(文中敬称略)

原 和 美



砂川闘争と
地域の女たち

砂川闘争

雄が選ばれた。町議会も、全員一致で反対を決議した。

終戦後、かつての日本陸軍立川飛行場跡は、米軍基地として使用されることになった。

米軍は、超大型機の発着に必要な滑走路拡張のため、基地周辺の農地を、半ば強制的に次々と接收していく。

一九五五年五月四日、砂川町長宮崎伝左衛門宅を訪れた東京調達局立川事務局長より非公式ながら、「砂川基地拡張計画」が通達された。

拡張予定地は、役場や郵便局のある町の中心地ともいえる四番組・五番組の住宅密集地帯であり、大動脈でもある五日市街道を南北に寸断する五万三千坪の土地と、百二十七戸の家屋とがそこにあった。

すでに講和条約も結ばれ、日本は独立国となっていた。今まで、被占領国ゆえに、米軍機の爆音と墜落の危険に耐え続けてきた農民たちは、初めて一斉に立ちあがった。

一方調達庁は、土地測量を強行するため武装警官隊を導入し、条件派と呼ばれる人たちの造反が目立ちはじめ、町は反対派と条件派の二つに分裂してしまった。

こうした苦境にたたながらも、反対派の結束は固く、闘争の輪は次第に拡がっていった。

一九五六年十月十四日、砂川町民による不屈の闘いと、世論の激しい抗議の前に、政府は遂に基地測量の中止を発表せざるを得なかった。そして、一九六八年十二月、米空軍は「立川基地滑走路拡張計画中止」を表明。翌年十一月、立川基地からの非公式の通告一日後、「砂川町基地拡張反対同盟」（反対同盟）が結成され、行動隊長に青木市五郎、副行動隊長に宮岡政飛行部隊の撤退を決定した。

国境を越えて

語り手

許 愛其(セイイチ)
(七十九歳)

一九八九年一月八日

その日集まつた人はおよそ十二、三人。友人の家の離れの会場では「伽倻琴」のための小さなコンサートが開かれていた。

演奏者は、朝鮮民主主義人民共和国に初の留学を許され、正月休みで帰國中の韓正美さん。ピンクのチマチョゴリの民族衣装が、十九歳の演奏者を華やかに包んでいる。日本の琴のルーツである十二弦の古楽器は、ひざの上に乗せて素手で弾く。体全体で音を奏てる伽倻琴の演奏は、おだやかな音色から始まり、やがて激しく、強く、哀しく時には伴奏の長鼓の軽快なリズムに乗って、弦の上を指がおどつていく。それは韓国、朝鮮の歴史の語り部のように、聴き手の心をゆさぶつていった。

キム・ジョンソク

砂川で朝鮮料理の店を営んでいる正美さんの母、金貞子さんのお内で、砂川三番から武藏村山に通じる東航通り（旧東京陸軍航空学校、後の東京陸軍少年飛行兵学校通り）にある正美さんの祖母許愛其さんを訪ねたのは、この演奏会の開かれる一ヵ月前のことだった。

砂川闘争に参加した多くの人たちの中に、当時、砂川に住んでいて、自らの意志でこの闘争に加わった外国人がいたと聞いたからであつた。

「ここは元少年飛行兵学校の面会所のあつたところだろうですよ」

そこだけは頑丈につくられた門扉を開けると、建築資材やスクラップが雑然と置かれた三角地帯の空き地の奥に、ブレハブ平屋建ての家があつた。鉄の固まりのような古びたバスが一台、家に寄り添うように置かれている。米軍用のもので、おそらくスクラップとして持ち込まれたものであろう。

「ばあちゃん、昔のぼれ、砂川闘争の時の話を聞かせてください、だつてよう」
十畳もあるうか、広い居間にはテレビ、こたつ、今では

珍しい電気コンロなど、必要なだけの生活用具しか置かれていらない。すぐ近くに住む娘や息子たちとの同居を拒んで、昔の暮らし様式に固執している愛其さんは、初対面では気難しいおばあさんとしか映らなかつた。額に深く刻まれたしわと、そつけない程の言葉のやりとりから、私が勝手に判断したことだつた。

語り始めた愛其さんは、とどまるところを知らぬほどに言葉をつないでいった。語りの接ぎ穂に「ほら、食べな」「お茶はいらないか」などの細やかな心遣いもうれしかつた。

聞き書きの訪問を重ねるごとに、本命の砂川鬪争よりも、愛其さんの生活の軌跡に魅せられ、引き込まれていった。

一九一〇年十一月二十七日、奇しくも大韓帝国併合の年、許愛其は忠清北道（韓国）の裕福な農家の一男六女の三番目として生まれた。

「家は貧乏じやあなかつたし、娘の頃は食べるものに困ることはなかつたよ。それに作男もいたので百姓なんかしたことなかつたよ」

両班ナムバンと呼ばれる上層階級の娘たちは、大門テイモンから外に出る

ことはめつたにない。娘たちは学校には行かされず、親が家中で教育したという。親に逆らわず、嫁しては夫に従い、老いては子に従う「三從の教育」が徹底していた。

この時期、大韓帝国は日本との併合によつて「朝鮮」と改められ、朝鮮総督府の統治下による日本の植民地政策が始まつた。

総督府が最初に手をつけたのが「土地調査事業」による強権的な土地収奪であつた。巧妙な手段で土地を奪われ、自作農から小作農へ、ある者は離農せざるを得ない状況に追い込まれる農民層がふえていた。

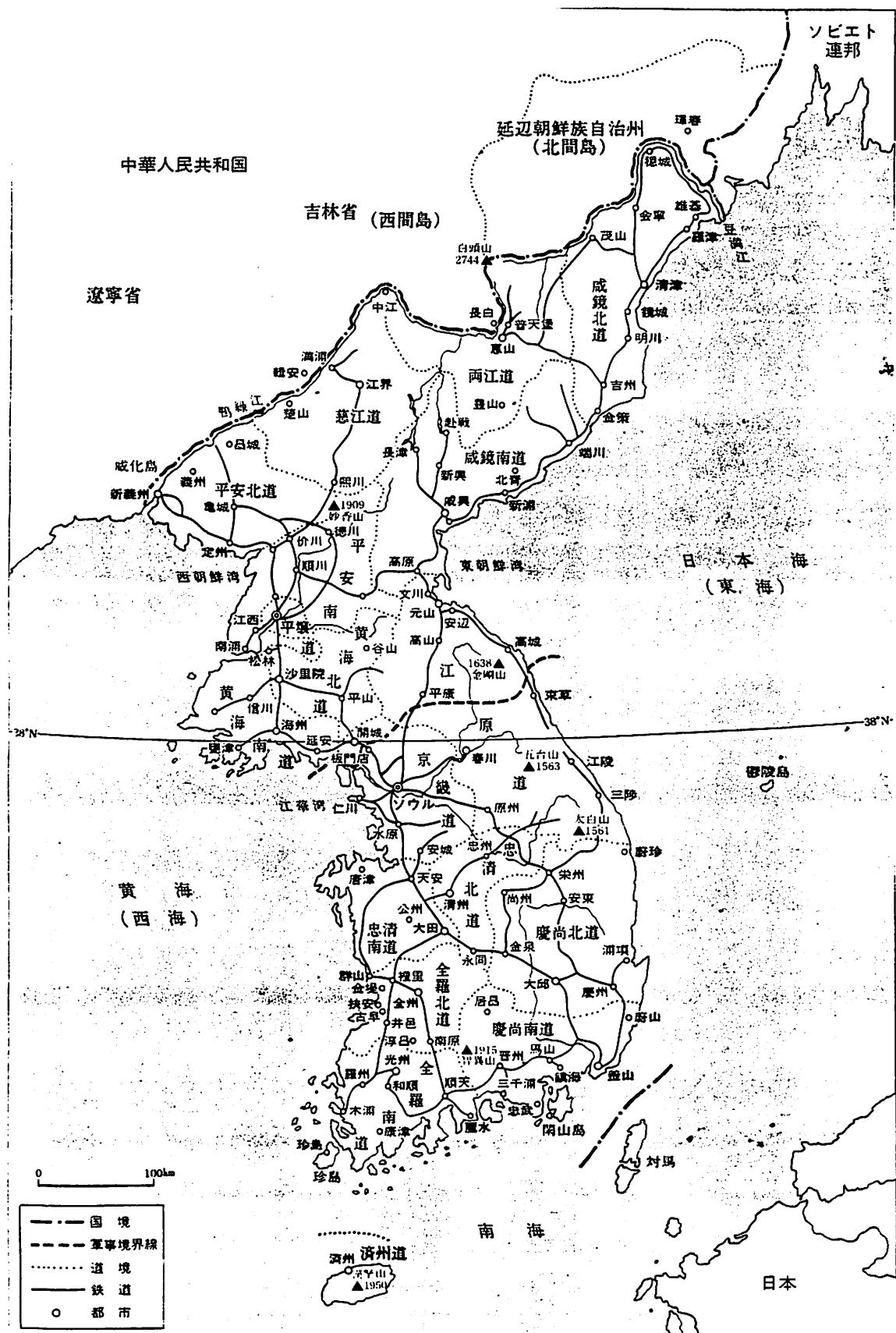
愛其は家の外の嵐に触れることもなく、穏やかで、一見平和な生家での生活を続けていた。

愛其に縁談が持ち込まれたのは、数え年十七歳の時だつた。それは、見合いもせず、本人の意志も聞かぬままに、親同士が勝手に決めた相手だつた。

夫となる人は、近隣の陰城郡大所面大豊里に住む金永万。本家筋に後継者がいないため、分家の長男である彼が本家の相続人となるための縁組だつた。

夫 数え年十三歳

妻 数え年十七歳



両班同士の有無を言わさぬ結婚だった。

家制度の規範の中で、日本以上に父系直系血統主義を重んじる「朝鮮」では、珍しい組み合わせではないという。

「嫁は家のために貰う。夫の家は貧乏だったよ。だから、わたしは初めっからしあわせじゃあなかったのよ」

それにしても十三歳の幼な夫、夫婦とは名ばかりの生活だつた。

「女の味をみれば、頭が悪くなり、勉強にも差し障りがある」との理由から、夫と妻はしばらくの間、寝所をともにすることはできなかつた。

一九三一年、長男出産。

日本は柳条湖に端を発する中国への侵略戦争を開始した。朝鮮は、その兵站基地として、「北羊南綿」、北の羊毛、

南の綿花の原料供給地となつた。全人口の八割を占めると言っていた農民は、さらに追い打ちをかけるように実施された「産米増殖計画」によつて、穀物の供出が強要され、自分たちの食糧の供給源まで断たれる結果となつた。朝鮮農村の疲弊は深刻化し、職と食を求めて日本への渡航が増加していった。

長女を出産した翌年の一九三五年、夫金永万は、愛其が

嫁入りの時に持つてきた牛を売つた金で旅費をつくり、日本にいる親戚を頼つて海を渡つていつた。

金永万もまた、植民地政策の犠牲となつた没落両班の人であつた。

子供二人と姑との生活が二年近く続いた。日本にいる夫からは、迎えに来る様子はなかつた。

「このまま夫婦が離ればなれになつていると、子供が親なし子になつてしまふ。子供のためにも、お前は日本に行つてあの子を連れて帰つてくれ。たとえ邪魔だといつて追い出されても連れて帰るんだよ。でないと、あの子は一生、ここには帰つてこないだろうから」

姑の強い言葉に促されて、愛其は日本への渡航を決断したのだつた。

「親戚のおじいさんにつき添つてもらつて、何回警察や役所に通つたかわからないよ。随分かかつたと思うよ。なかなか許可がおりなかつたんだよ」

第一次世界大戦の軍需景気に沸いた一九一四、五年代、日本国内の労働力不足を補うために渡航を奨励した日本政府も、一九二五年になると、国内の経済不況と失業者の増加を理由に、渡航を制限するようになつた。

一九二八年、朝鮮総督府は

一、就職確實と認められる」と

二、船車の切符代その他必要なる旅費を除き六十円の余裕あること（出発地においては目的地の所要旅費見込み額と準備金十円以上所持すること）

三、モルヒネ中毒者に非ざること

四、労働ブローカーの募集に応じての渡航に非ざるものとなること

等の渡航基準を設け、渡航を希望する朝鮮人は窮地に追い込まれていった。

一九二五—二七年までの二年間だけでも日本への渡航を阻止された数は八十三万四千七百七十五人にものぼつている。渡航制限は一九三八年まで続いた。

「あとで迎えにくるから」と、七歳になる長男を姑に預け、五歳の長女を連れて日本に渡ったのは、手続を始めて一年後の一九三八年、愛其は二十九歳になっていた。

この翌年から敗戦の日まで、日本は長期化する戦時休制に備えての軍需産業の拡大と労働力の不足から、朝鮮人の強制連行を始めた。

「日本に来て、初めに住んだのが小平の小川町よ。二カ

月くらいいたかな。それから山梨県に半年くらい。言葉がわからず、随分いじめられたよ」

「着るものは、⁽²⁾祖国を出る時持つてきたチマチョゴリしかなく、それを着て表に出ると、日本人の子供たちは『朝鮮人バカヤロー、にんにくくさい』って、ののしりながら鼻をつまんで逃げていくのよ」

近所に、長女と同い年の男の子がいて、よく遊んでくれてはいたが、「お前、言葉がわかんないくせに」と言つてしまひじめもした。長女はそのたびに「カアチヤン」と泣きながら帰ってきた。

「お前は、本当に日本語がわからないんだから、いじめられても仕方がないよ。我慢しな」と慰めはするものの、愛其は口惜しかつた。子供も自分も、外にさえ出なければよいとさえ思つた。

「食べるのも、初めは夫の買つてくるものだけ食べていたよ。幾ら祖国のもの食べたくつても、食べられなかつたよ」

チマチョゴリ姿では日本人にいじめられるので、自分の小遣いで日本の着物を買うこととした。夫がよく「ツケ」で買つている店だつた。

言葉が通じないので、ほしい品物を「これ」と指で差して、代金は手の平に乗せたお金の中から必要分を取つても

らつた。ところが

「自分では一銭もくれないくせに、日本の着物を買つてくると、おやじと喧嘩になつた。店の奥さんがおやじに告げ口したんだよ。あたしが着物のほかに油一升買つたつて。

『買つたろう』『買わない』で喧嘩になり、口惜しいから

『一緒に店に行つて、あたしが油を買つたかどうか確かめてみる』と言つても、おやじは『あの人気が嘘つくわけがない』と怒るんだよ。その店の人は、親父にはツケで山ほど品物を買わして、代金はみんなあたしのところにまわしていくのに……全くあんなに口惜しいことなかつたよ』

祖国を出る時持つてきたチマチョゴリは、その後着ることもなく、今でも押し入れにしまつたままであるという。

男つぶりがよく、妻以外の女性との喧も多かつた夫は、『飲む、打つ、買う』の典型的な亭主閑白でもあつた。他人にはよくしてやつても、家族にとつては好ましい存在ではなかつた。

「おやじによく言われたよ。『お前の顔はみつともない』つて。口惜しくつて、三日も四日も飯食べなかつたことだ

つてあつたよ』

「あれは山梨にいた時だつたと思うよ。おやじは姑と伴を連れに祖国に帰つていつて、二カ月か三カ月、向こうに居たかな。墓のある山だけ残して、畑や家をみいんな売つちまつたのよ。あたしには小遣いひとつくれず、その金、みいんな飲んじまつたのよ』

「全くお前のお父さんはひどい人だつたよ』

夫からはいじめられどおしだつたと愛其は怨恨を込めて語る。言葉も地理も習慣もわからず、生活の基盤さえも不安定な日本に「来るんじやあなかつた」と強く思つた。

その頃、在日朝鮮人の職業は、日本人労働者の嫌う重労働、低賃金の仕事（土工、雑役夫、日雇い、廃品回収等）しかなく、居住も河川敷や飯場の掘つ立て小屋など、劣悪な環境での雑居生活だった。それでも仕事にあぶれ職を求めて、各地を転々としなければならなかつた。

愛其一家も同じような経路をたどつた。

小平、山梨、谷保（現国立市、ここで金貞子が生まれる）そして砂川村（現立川市）へと。

「初めは砂川五番の青木さんの家作に住まわせてもらつたのよ。おやじがあのとおりのフーテンなので、あたしが

(軍事施設のために接取された土地)

大正五年 一、八三〇坪

立川飛行第五聯隊

大正十一年 六、七六五坪

立川飛行第五聯隊

昭和十年 一四、七〇一坪

陸軍技術研究所

昭和十三年 一〇一、〇一五坪

陸軍技術研究所

昭和十三年 二、一五九坪

陸軍少年飛行兵学校

昭和十四年 七九、八八一坪

陸軍技術研究所

昭和十四年 六八、〇六二坪

陸軍技術研究所

昭和十六年 一六〇、九〇六坪

陸軍技術研究所

昭和十六年 六九、二一六坪

陸軍資材本廠

昭和二十一年 一六、五〇〇坪

米軍立川基地

昭和二十一年 五四、四二九坪

米軍立川基地

昭和二十一年 三、一三六坪

米軍立川基地

昭和二十一年 九九、〇六二坪

米軍横田基地

昭和二十五年 八、九九四坪

米軍横田基地

宮岡政雄「砂川闘争の記録」

廢品回収をやつて子供たちを食べさせていたのよ
愛其の日本での生活も安定しかけていた。

一九四一年（昭和十六年）太平洋戦争が始まる年の一月、突然、立川飛行場の拡張工事計画が発表された。

——陸軍航空技術部によるこの拡張で、滑走路は全長二千メートルになり、これによつて立川飛行場はコンクリート化された滑走路を持ち、近代的な諸施設を持つた軍事基地となる。私の住む部落の農民のほとんどがこの拡張計画に含まれていた。

この拡張計画の実施の前に、関係者が村役場に集められ、軍刀を片手にした陸軍の参謀本部から来た軍人から拡張計画の話を聞かされた。関係者は黙してこの計画を聞くだけで、軍の飛行場の拡張工事が実施された。この時私のところでは住宅から三百メートルのところまで基地が拡がってきた。この軍部の土地收用によって、私の部落でも数人の人たちが農業をやめて付近の航空工場に勤めるようになつた。

——宮岡政雄「砂川闘争の記録」——

この拡張工事によつて、砂川と中央線立川駅をつなぐ都道は分断され、百戸以上の民家が立ち退かなければならな

かつた。

愛其一家が落ち着いた五番の家作も、その中に入つていた。

「全く何にもいいことなんかなかつたよ。飛行場の原つばつくるからつて追い出されちまつて、それで三番に移つたのよ」

「貞子がまだヨチヨチ歩きで、ほれ、あの前の川に（砂川用水）はまつたりして、大変だつたよ」

金を持つと、持ち前のきつぶのよさで、はでに使って家族の生活を省みない夫と、愚痴つぼくなつてまた姑につかえて、愛其はまどろむ間もなく働かなければならなかつた。
廃品回収のほかに、新しく始めた自転車のパンク修理も、夫は一週間に一度だけパンクに貼るタイヤを焼くだけで、あとは妻ませだつた。

「まじめに仕事すれば、食べるに困ることなんかなかつたのに、全く仕事するのが嫌いな男なんだよ。自転車パンク修理を頼まれても、約束の日までにできやあしない」

ちょうど日本の大学に留学していた親戚の子に修理の仕方を教わつて、愛其は自転車修理にも手を広げた。

「十本貼つても二十本貼つても、たつたの十銭だよ。十

錢でももらえれば宝だつたよ。味噌買いたくつても買えなかつたからね」

廃品の回収は姑も手伝つてくれてはいたが、日本で生まれた幼い子供を抱えての生活は厳しいものだつた。子供たちも大きくなるにつれ、少しずつ母親の仕事を手伝う程になつた。

「あたしなんか、お母さんのパンクの貼りを見て覚えたのよ。だから、子供の自転車のパンク貼りは、みんなあたしがやりましたよ」と次女の貞子は言う。

生活は苦しくても、夫に裏切られても、愛其もまた朝鮮の女性。夫唱婦隨を「是」とする教育をしつかり身につけていた。

その日の米代にさえ事欠いても、夫の身内が訪ねてくれるば、やりくりしてもてなした。

そんな愛其に、夫は感謝するどころか、「ジ」とそんな金があつた」と罵倒することが多かつた。

「男は気に入らなければ、ブイと出かけてしまつて、家のことなんか構やしない。女はどんなことされても、子供のために我慢しなければならなかつたのよ」

だから、女は自然に強くもなると愛其は笑いながら肯定

する。

一九四五年、戦争は末期状態に入り、米軍機による日本本土への空襲が激しくなってきた。軍需施設を抱える立川、砂川も例外ではなかった。

愛其の住む砂川も、米軍の空襲で家を焼かれ、多くの死者を出した。砂川三番の愛其の家は、幸いにも被害を免れ、八月十五日の敗戦の日を迎えた。

朝鮮は、日本の圧政から解放され、在日朝鮮人は祖国への帰国準備を始めた。けれども、その喜びもつかの間、再びアメリカとソ連による分割占領で、三十八度線を境にして、北の朝鮮民主主義人民共和国と南の大韓民国に二分された。分割後四十数年、祖国統一の悲願はいまだに達成されていない。

愛其は大韓民国の出身。兄弟たちは日本に渡航することもなく、祖國の地に住み続けていた。

「あたしは帰りたくても帰れなかつたのよ。おやじの

韓国の家も畑もみんな売つちまつてないんだもんね。今さら実家には帰れないし、帰りたくもないよ」

日本に渡航して以来、愛其は一度も祖國の土を踏んではいない。

「三番の家は自分の家だつたのよ。土地は借りものだけれど、百坪くらいあつたかな。ボロの材木を集めて、おやじが建てたのよ」

それだけに愛着も深い。

「畑も借りてつくつていたよ。娘時代は百姓なんかしたこともなかつたのに」

敗戦の年の十二月、日本政府は「農地調整法改正」を公布。翌年、「第一次農地改革」を施行した。小作人制度はなくなり、地主階級は土地を手離さざるを得なくなつた。

「借りてた畑も、農地解放の時、買取つたのよ。そこに麦やさつまいも、じゃがいもも植えたよ。自分のところで食べるだけじゃあなくつて、供出もしたんだよ」

「長男が結核になつた時も、入院させる病院がなくつて、家で別の部屋に寝かせて、別の食事つくつて食べさせるのよ。畑やりながら介抱した。全く、のんびりする暇もなかつたよ」

家のことは姑に任せて、愛其は朝早くから畑仕事や廃品回収に出かけていった。どんなに忙しくても、どんなに疲れていても、長男のために一日一回、立川に出かけていっては栄養になる魚や卵を買ってきて食べさせた。

戦後に生まれた子供を含めて四男三女の大家族を抱えて、愛其は「よく体がもてたものだ」と思うほど働きづめだった。

「忙しい時には、子供たちもよく手伝ってくれたけど、人も頼んだよ」

「今、住んでいるこのあたりは何もなくって、全く砂漠みたいなところだったよ。

あれは末の子が三つか四つくらいの頃だったかな。おやじがあんまりいじめるので、家出ていったのよ。子供たちがかわいそそうだったけど、もう我慢できなかつた」

家から歩いても四、五分くらいのところにある畑の真ん中に掘つ立て小屋をつくって、一人住まいを始めたのだった。

「水もなんもないところなので、夕方早めに畠済ませて、三番の家に行くのよ。子供たちの様子を見ると、水もらつてくるのとで……。あとから地下水道掘つて水出したけれど、全く苦労したよ」

子供たちは畑の掘つ立て小屋にいる母のもとに、いつの間にか集まってきた。

「畠仕事しながら、豚も飼つたよ。四十頭くらいいたか

な。朝早く起きて、豚の餌集めるのは子供たちよ。どこから残飯たくさん集めてくれるのよ。一日に三回、人間と同じに食べさせてるので大変よ。大釜で残飯をたいて豚に食べさせるの、みんな子供たちが手伝つてくれたのよ」

愛其が今住んでいるプレハブの建物は、豚小屋を改造したものだという。

祖国で失つた土地を異国で求めることへの執念からか、愛其はこうして蓄えた金で少しずつ土地をふやしていく。

土地の名義はすべて夫金永方のものとした。

「あたしのものにすると、『カカア天下』と言われて子供たちが惨めな思いをするといけないから。

だけど、おやじ、自分が手に入れたように威張つていたよ」

一九五五年五月、突然、東京調達局から砂川町に「米軍基地拡張案」が通達された。これが実施されれば、町の中心部が滑走路の中に消えていく。町の人たちはすぐに「砂川町基地拡張反対同盟」（反対同盟）を結成し、「砂川闘争」と呼ばれる米軍基地反対闘争に立ち上がった。

武装警官を導入して拡張予定地の測量を強行しようとする



る調達局と反対同盟との間で、連日のように激しい攻防戦がくりひろげられた。

愛其の土地、家屋は拡張予定地の中に含まれてはいなかつたが、闘争には自分の意志で積極的に参加した。

「あたしはいつも用事を済ませていくので、みんなよりおくれてしまふのよ。でも、いつも出かけていつたよ」

「歌うたいながら、スクラム組むのよ。あれ、何の歌だつたつけ。忘れちまつたよ。おやじは闘争には無関心で、『取られたら、やつちまえばいいだろう』って言うんだよ。だけど、あたしは出かけていつたよ。自分の住んでいるとこを守るの当たり前でしょ。先祖代々の土地、守るの当たり前でしょ」

「そうそう、こんなこともあつたんだよ」と前置きしながら、

いつものように愛其は家のことを済ませて現場に駆けつけると、反対同盟の人たちはすでにスクラムを組んで警官隊とにらみ合っていた。

スクラムの中に入ろうとしたのだが、入れない状態なので、愛其は仕方なく、その人たちの足元にしゃがんで、成り行きを見ることにした。

「そしたら、警官隊が管の先に長いキセルみたいなもの
がついたの引っぱってきて、そこから消毒液が吹き出して
いるの、スクランム組んでいる人たちに向けてかけてきたの
よ」

「まさかと思つたけど、あれ、目つぶしの消毒液だよ。
かけられるとだれでもびっくりして目をこする。そしたら
スクランムとけるでしょ。どんなものでも目に入れば、たま
つたものではない。警察官も、全く頭いいよ」

「『バカヤロ！』って怒鳴つてやつたよ。そしたら、写
真持つてる人がいて、あたし、写真にとられちまた。全
く口惜しい知らないよ」

何も悪いことしていないのに黙つて人の写真をとるカメ
ラマンにも腹が立つたが、警察隊の目にあまるあの行為は
許せなかつたと、愛其は声を高くする。

土地を奪われる者の悲しみと苦しみを、愛其はだれよりも
よく知つていたし、土地を得ることの苦労も知つてゐる。
「社会党、自民党、共産党、そんなのどうでもいいんだ。
子供連れてれば、家族がいれば、土地、手離しちゃあなん
ないよ。しつかり守らなきやあなんないのよ」

愛其が党派もイデオロギーも、国境さえも越えて、反対

同盟のスクランムの中に入つていったのは、砂川に定着しよ
うとする一町民としての純粹な気持ちからだつたろう。

「富崎町長、青木さん（行動隊長）、宮岡さん（副行動
隊長）、みんな一生懸命やつたのよ。だから、土地、とら
れなかつたんだ。全く大した闘争だつたよ」

当時、砂川在住の外国人として砂川闘争に参加したのは、
許愛其ただ一人だつた。

そして今なお、土に生きる農民の意志を、^{「二}國境を越えて
貢き通している。

「目をつぶると、いろんなことが浮かんでくるよ」

と愛其さんは、言葉をつまらせる。

日本に住んで二分の一世紀。

憎しみしか残らなかつた夫金永方さんも、七年前、韓国
で急死した。愛其さんとともに日本に渡つてきた長女も、
昨年、永方さんの七年忌で韓国に行き、日本の自宅に帰つ
た直後、心臓マヒで亡くなつた。

「ああ、日本に来て、なあんもいいことなかつたよ」

栃木に住む長男と茨城に住む末娘を除いて、三人の息子
と二人の娘（金貞子さんと亡くなつた長女）一家は、いず

れも愛其さんの近所に住んでいる。

「日本に来て、マンション暮らし、させたくないから、子供たちは、みんな土地買って家建てさせたよ。あたしには、細かいことわかんないけど、みいんな、しあわせなんだろう」

「お母さんは、言い出したら聞きこないし、何買つてやつても、使わないんですよ」

全く頑固で……と、娘の貞子さんは言つ。

愛其さんは、だれにも気兼ねすることもなく、日の出とともに起き、好きなテレビを見、気が向けば散歩にも出かける。食べたい時に食べたいものを食べ、日没ともに床につく。

他日にはどうであろうと、気ままに使える自分の生活空間と時間の中で、愛其さんは、

「自分にだけしかわからないしあわせ」をつむいでいるのかも知れない。

帰りがけに「持つていきな」と両手に乗せてくれたゆでじやがいもから、飾らぬやさしさが伝わってきた。

(敬称略)

竹内信子

参考文献

- 「朝鮮人強制連行の記録」
- 「韓国現代史」
- 「世界年表」
- 「65万人－在日朝鮮人」
- 「わたしたちと朝鮮」
- 「韓国の本」
- 「日本の侵略　　中国・朝鮮」
- 「砂川闘争の記録」
- 「立川飛行場物語」
- 「もっと知りたい韓国」
- 「海を渡った朝鮮人海女」

座

談

会

後記にかえて

「司会」前号に引き続き、座談会形式でお互いのテーマの関連性をとらえることにしました。まず一年近く追つてきた自分のテーマについて、どうでしよう。

【原】なぜ横田基地があれほど大きくなつたのだろうかと調べていくうちに、中里の部落問題や集団移転の話を聞くことができました。これまでただの雑木林と思っていた所が、かつては八〇〇世帯が住んでいた土地だったのですね。こういう話は全然知られていないし、自分も知らない。どうして消されてしまったのか、その辺りが興味深いところでした。

【竹内】私がお会いした方は、外国人として砂川闘争に参加なさった女性でしたが、現にお子さんたちが近所に住んでいらっしゃる上に、在日韓国・朝鮮人の問題には複雑な歴史的背景があります。その波瀾万丈な人生の全ては書きたいけれど、書けないわけです、プライバシーに関わる」とが大部分ですから。結局取材した内の半分以上を捨てなければいけない。書きたい内容を充分に伝えられないもどかしさ、つまりは聞き書きの限界を感じてしましました。

【川久保】テーマは六号に統いて、砂川のキリスト教を取

り上げました。今回は人間に焦点を当てて調べたのですけど、たけ乃や肇、女性のことは断片的にしか判らなかつたのです。それで村長もしていた島田角太郎を書くことから探つていこうと考えました。大正・昭和をどう生き、何を考え、行動したのか、そして砂川に教会が建てられてから壊されるまでを、「一生」を追うように書いてみました。

【吉沢】二・二六事件を選んだのは、本当にひよんなどでした。「砂川から二・二六事件に参加した方がいて、そのお母さんが憲兵に連れていかれたところを見た。とても大変な思いをしたようだ」という話を聞いたのです。最初の意図としては、下級兵士や家族の側から見た二・二六事件を書きたかったのですけど、話を聞くのが男の人中心になつてしまつたので、生活の地道な面を充分に聞き取れなかつたことが悔やまれています。先ほど「資料がない」という話が出ましたが、私の場合は逆に、あり過ぎる資料をどう使っていくのかで苦労しました。

【司会】お互いの原稿やテーマについてはいかがですか。

【矢ノ口】林郁さんがおっしゃつてましたね。『「事実」と「真実」は違う』って。一つの定義を擧げると「事実」というのは男の為政者たちが作り上げた歴史、「真実」というのが女の視点からくつがえした歴史だ、というね。皆

の原稿には「真実」がたくさん出てきます。でもだからこそタブーも多いのです。私は今回は全然書かなかったのですが、いかにしんどい作業なのかがヒシヒシと伝わってきて、「頑張つてください」という励ましの言葉を簡単に言えなくなりました。

【草場】この『つむぐ』が単純な聞き書きから一步成長して、歴史的な事実を自分の手で確かめながら進められるようになってきたとは思うの。ただ男の人からの聞き書きが、大きなウエイトを占めて登場してくるようになったわね。

【原】それがいいのか、悪いのか。「女人からの聞き書きで」というのが原点だった気がするの。そこをもう少し深めていきたいのだけれど。

【川久保】女性までたどり着かないという感じなのね。資料を探しても支配者側にいた男性の記録ばかりで、妻や娘は触れられていない。「事実」と「事実」を埋める作業なのに、推測に頼るしかないんですね。資料がないというのは、地域女性史をやる上で一番の問題ではないのかしら。

【竹内】確かにね、資料として、女が書かれている記録というのは。

【川久保】ゼロに近い。

【竹内】そう。でもだからこそ始めたのが、この『つむぐ』

だと思うの。聞き書きという手法で、小さな落穂拾いのように、切れた糸を少しづつ紡いでいたら、どんな織物ができるだろう、女の側から歴史を見たら、どんな綾が織れるのかしら、という思いでね。だから「資料がない」とあきらめないで。男たちが作った記録をタテ糸とするなら、今度は私たちが女の記録を、歴史のヨコ糸をつむいでいくんだと思いながら作業をしていきたいの。

ただ今号はどうしても男の歴史に突き当たってしまう、本意ではない形になってしまったようだけれど、テーマによつては仕方ないことなんじやないかしら。

【吉沢】女人の人の暮らしというと、家の中の苦労話や町内の出来事については鮮明に記憶しているのだけれど、社会との関係で自分がどうだったかを確かめてみるような機会が、ほとんど無かったわけだものね。

【原】そう、生活の話が中心で、社会情勢については忘がちなのよね。自分を振り返ってみても「大平内閣の次は誰だったかしら?」なんて(笑)。

【吉沢】だからその人にとつては「真実」であることが、「事実」とは違うというケースもある。となると、結局男性が書いた資料に頼らざるを得ないのだけれど、歴史をどう読むのか、どう話を聞くのかというところで、こちら側

の姿勢も問われてくるように思いましたね。

「司会」では、これから活動に向けて考へてていることを話して下さい。

「原」純粹な書きをもつと大事にしたいと思いました。
だから今回、草場さんが無くて、すごく淋しかった。

「川久保」私はいろいろな方法があつていいと思うの、問題の迫り方に。

「竹内」そうね、得手不得手がそれもあるし。一番その人に適つた、自然な手法を選んだ方がバラエティーに富んで面白いんじやないかしらね。好みはあるけれど。

「川久保」テーマをトータルにとらえたいと思うの。砂川のキリスト教でも、やはり飛行場と関係があるし、基地があれば労働問題、米軍が来れば売春の問題、そして砂川闘争が起きている。今号ではバラバラな感じになつてしまつたけれど、全部つながつて、からみ合つているのよね。

(うなずく一同)

「吉沢」個々のテーマに沿つて取り組むと同時に、共通理解を深めるような学習をじつくりやりたいわね、歴史を見る目を養うためにも。

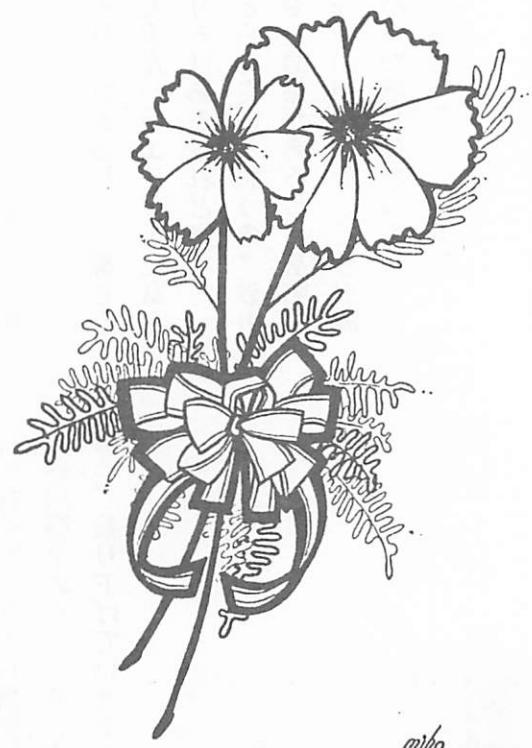
今回特に感じさせられたのだけれど、聞いた話が面白いと、次はもっと面白い話でないと興味がわかないという、

強迫観念にとらわれていくような気がしたの。なんだか私たちが目指していた地道な活動から遠退いていきそうで。先へ先へと走るのでなく、戻つてみることも必要だと感じています。

「司会」次号までは少し時間がかかるかも知れませんね。
『つむぐ』スタート当初に掲げた三本柱、「砂川の女」、「砂川闘争の女」、そして「基地の女」について、原点に戻つて掘り下げていきましょう。



1989. 5. 16



講演

民衆史を生きた女たちパートII

—今、「満州」が問いかけてくるもの—

—十二・三・林 郁 講演会より—

昨年十二月、立川・女の暮らし聞き書きの会、主催、企画による講演会「民衆史を生きた女たちパートⅡ」が開かれました。これは「今、「満州」が問い合わせてくるもの」という題で作家の林郁氏にお話しいただいたものを要約したものです。

月日・一九八八年十二月三日
場所・立川市中央公民館



民衆史を生きた女たち

——今、「満州」が問い合わせてくるもの——

林 郁

聞き書きから問う現在・過去・未来

『つむぐ』という言葉に、私も惹かれました。「創る」でもいいと思ったのですけど、物事というのは一気に創れるものではなくて、一日一日の、地道な積み重ねの結果、成ることが多く、紡ぐ方が強いのではないかと思つてゐるからです。それにこの文集は「皆でやっていく」というおもしろさがあります。

私は学生時代は中国経済を学んでおり、研究者志望でしたが、結婚後、下の子どもを火傷させてしまって、八年間、専業主婦をしました。その子の植皮手術には六時間かかりました。始めの三時間くらいはじっと我慢していたのですが、だんだん待つてゐるのが苦しくなつて、その時の思いのたけを無我夢中で書きつけたのが、物を書いた初めてです。もうすぐ三十歳という時でした。

それでいつの日か本になるといいなと思つていました。

子育ての実感から、「石の上にも十年」と決めたら、思つた通り、あと一步で四十という時に『風の声が聞こえる』という本になりました。その後もあんまり急がずに、年に一冊くらい書くと決めまして、だいたい予定通りにやっています。『つむぐ』と言えるほど立派ではありませんけどね。

物を書くということは、もう一度ファイードバックする、振り返るという要素があります。これから未来に向かつて何をしたらしいのかと、個人の生き方も問い合わせようになりますね。自分の根っこを掘つてみようと、地元である長野県の岡谷のことを調べ始めたんです。

かつてはシルクの都として、ウォール街と結んで世界的に発展し、生糸業の集中地だったところです。日本の輸出の八〇パーセントを支えていて、町のほとんどの女が工女でした。私の母も工女でした。そのもうと前はと、さかのぼつて調べていくと、面白くてね。

例えば一七〇年前の古文書に「乞食入用」という大文字が出てきます。これは乞食に予算を取つていたということなんですね、村落共同体で。乞食だけではありません。「障害者」とか、さすらつて来て居着いちゃつた人とか、病んでいる人とか、「負」と思われてゐる人たちを助けて、逆

に生かしていく発想が封建時代にもあったのですね。

ただ私たちは現に、現代という真っ只中を生きている訳です。国際関係や家庭や学校、職場の問題、いじめの問題とか、そういったものを引っ抱えて今を生きている訳です。ですから歴史を物事のタテ軸とすると、新しい時代はタテばかり見ていたのではわからない、未来が見えなくなるということがあります。

それでヨコ軸もということで書いたのが『家庭内離婚』であり、『やさしさごつこの時代』です。これは現代の若い人たちの、「一見スマートに生きているけれども、何か不安でわびしい」とか、「自分が傷つきたくないから、他人とつき合わない、関係を結べない」といった状況を書いたものです。私がもう少し生きられたら、タテヨコ、タテヨコと一つおきに書いていくて、気がついてみたら、小さな織物のようになっていたらいいな、という思いで仕事をしています。

そういうことで、体験だけを書いているのではありません。私の体験は浅いのですし、戦場にいた訳でもありません。あまり苦労していない人間なんです。ですから他の人のいろんな、正も負もひつくるめた体験を聞くのが本当に好きですね。

聞いていくうちに、学校で習った歴史というものが、いかに狭いものかが判ってきます。男の為政者たちが作ったものは、大きな事件でなければ記録されないでしょ。小さければ、価値も小さいという訳ではないんですね。政治的立場やイデオロギーに立って見聞きすると、大事なものを見落としてしまう訳です。匿されて、こぼれてきたものを集めたら、書き書きを寄せ集めて歴史を作り直したら、かなり違った歴史書ができると思いますよ、皆が今信じているものではないものが。

好きなことはどうしても無我夢中で聞いてしまうのですけど、今は性の合わない人の話も、敵視しないで聞けるようになつてきました。イデオロギーなんかで断罪してしまうと、また偏った実録を残すことになりますから、予断を捨てることが大切だと思います。

それから私は具体的な話が好きです。ただ思いのだけを聞くだけでなく、その時に何を着ていたかとか、お金がいくらだったかというようなことが、後にとても役立つからです。

もう一つ大事なことは、想像の力です。私の場合、体験していないことを書く訳ですから、聞いたことを自分の中で想像してみると、その人の身になつてみることが必要にな

つてきます。中には自分の体験だけを絶対正しいとして、頑固で熱っぽい人もいますが、それでは体験していない人は何も判らなくなってしまうでしょ。「戦争を知らない人は、戦争のことを書いてはいけない」なんてことはない訳ですし、逆に体験していないからこそ書けることもあると思います。もちろん想像することは難しいのですけど、人の出会いが想像力を膨らませてくれることがありますね。それが私の満州の本だったと思います。

どの人、「ソ連がある日突然来て、逃げた」という逃避行の話から始まります。私たち、日本にいた者は、戦争はもつと前から始まっていたと実感してますけど、満州にいた日本人はある種の幻想境、解放されたような気分で生きていたようで、戦争の始まった日を「昭和二十年八月十日」という人が多いんですね。そして戦争は今も終わっていないというんです。

私は一九三一年九月十八日の満州事変を開戦と考え、十五年戦争と言いますけど、大陸にいた人たちは、戦争が始まつた時も終わつた時も、個別でかなり考え方方が違つています。(※)

消された歴史を書き留めたい

私の生まれた長野県は、最も満蒙開拓団を多く送り出した県です。それだけ貧しかった訳です。大日向村というのが満蒙開拓のモデル村になり、映画や小説や新国劇にもなつて宣伝され、「満州へ、満州へ」という熱がだんだん昂じてきました。そして当時貧しかつた八県が満蒙開拓団として指定されました。これは『満州・その幻の国ゆえに』にも書きましたが、あんなに暑い沖縄からも酷寒の大陸に開拓団が出ていったのです。

敗戦後の引き揚げの方たちから話を聞きますと、ほとん

いわゆる「留用」といわれる、八路軍などと共に内戦を闘つた人々がいます。お医者さんや看護婦さん、技師とか、そういう人たちは共産党側の戦闘員として、革命を闘い、一九五三年と五八年、そして六〇年に引き揚げてきました。この人たちは激しい戦争や土地革命を経てていて、苦しむ中国人のことを知っています。新中国に共感を持つています。当時の八路軍というのは、規律が正しく、皆平等で、励まし合い、育て合う軍隊でしたから、良き時代の革命の息吹を感じていた訳です。日中平和友好会というの

がありますが、そのメンバーはこの人たちです。

それから第三次の引き揚げ、帰国というのが、日中國交回復の一九七二年から始まります。平和条約締結は七八年ですが、七二年に田中角栄が行きました。中国に残されたいた人々は皆、涙を流して喜んだそうです。その一つの流れが、今増えつつある「中国帰國者」、括弧付きの「帰國者」です。なぜなら一緒に来ている親族は中国人であり、日本人ではないのですから、帰国するという言葉 자체がおかしいので、渡来民なのです。新しい意味の。

この人たちの苦労というのはまた違います。文化大革命もありましたし。日本の侵略者の肩代わりとなつて、負の歴史のツケを負わされてきた人たちです。

そこはもともと多くの他民族の住んでいた土地なのです。既に開拓してある土地に、「開拓団」という名前で行きました。ほとんどが既耕地で農業をやりました。

日本にいる時は電気もつけられない、肉なんて食べたこともない、本当に貧困だった人たちが大陸に行くと、もつと貧しい現地民を使いました。良くない言葉だと思いますが、その人たちを「苦力」と言い、最初のうちはその人たちの痛みを感じたそうです、酷使することに対して。自分たち

も貧しかったので。ところが慣れというのは恐いもので、便利さに慣れてしまうと、今度は苦力を使うのが当たり前になってしまったというんです。私たち、現代の落し穴もそこにあります。

一人一人は皆いい人です。でも人使える立場になると、よほど心ないと支配してしまう訳です。ですからシステムとか、構造は、その時代の大状況を含めて、とても大事だと思うのです。

私が「そこは誰の土地でしたか」と聞くと、今になつてやつと既耕地だったことに気づいていたと言うんです。移民してすぐ、かぼちゃなんか枕くらい大きくて、じやがいもは赤ちゃんの頭ぐらいのが穫れたというんです。耕してあって、肥えていたので、これは変だと思った。しかし安く買い入れた土地を配給されたと言われ、すぐそれを信じてしまつた。

私が謀略のことを聞けたのは、命令を出した 関東軍や警察の偉かつた人からです。『満州共産匪の研究』(復刻版・大安)を見ますと、「紅匪」の名が出てきます。これはどういう人たちだったかというと、農民なんです、元は土地を取られて抵抗し、抗日連軍という組織に入つたために、「共産匪」と呼ばれた人たちです。今も開拓団の人た

ちのほとんどが「匪賊が襲ってきた」としゃべるものです

から、日本人にはなかなかその実態が判らない。私が開拓団の人達と現地を訪ねたら、私たちを遠巻きにじつと見て

いる人たちがおり、その時は現地の人と接触できなかつた。元開拓団員は「私の家、私の家」と言つて、瓦礫のようなレンガの跡を捜し廻つた。そのうち誰かが「鳥居が無い」と騒ぎ始めたのね。鳥居は日本の神社のものですから、今はある訳ないんです。それを四十年近く経つて、まだ「無い」と騒ぐ人たち……。善意にも聞わらず、いかにトータルな歴史や他民族を理解する教育がされていないか。仲間内の言い伝えだけを信じている若い人たちもいて、恥ずかしかつたですね。戦争がどういうものか言わないで、日中友好のバッジを付けて、他民族の土地で日本中心に自分のことだけ言つているんですから。

そういうことを書いた後、すこく欲求不満がたまつていて、「いつか私は消された、殺された側に立つて、向こう側とこちら側とつき合わせたい」という気持ちになりました。

(※) 満州事変からを開戦とする「十五年戦争」という認識は、文部省が認めない考え方です。(講師注)

「女を売つて、国際交流」?

『満州・その幻の國ゆえに』を読んだ方からは、いろいろなお手紙を戴きましたが、本の欄外にびつしりと書き込みをして送つてくれた人がありました。その人は元満州の警察官で、奥地の開拓団が逃げる時の指導者だった。

「あなたは開拓団の残留婦人を書いているけれど、その奥の国境にいたのは特務かほとんどだった」と言つんです。「特務」というのは、いわゆるスパイ作戦とか、アヘン作戦をソ連に向けて展開した人たちです。「その奥さんたちを残してしまつた。シベリア出兵の時にも、女を慰安婦として連れて行つて、男たちは引き揚げたけれど、女性たちは残してきた」それを聞いた時、私は頭と背骨がピッとした、「重層的だ、歴史が」と思いました。

その「残留婦人」たちは特務の妻として、悪いこともしないかも知れません。でも敗戦後は被害者になつたに違ないない。

私はすつと気になつていたのです。

残留孤児と会う時に、一緒に行つてもらう女性がおり、そのWさんと話しているうちに、彼女が撫遠ブヨンという町に残

された警察特務の奥さんだと判つたのです。

私は中ソ国境に行こうと決意しました。戦争のことを調べるだけでなく、アムール・ウスリーの河岸に住む少数民族の生活文化が面白くなつて、申請を出しました。国境には解放軍の中枢部隊がいますから、特別未開放地区で、普通は旅行団は入れません。なかなか許可が下りませんでした。

そこで向こうの外事弁公室の人来た時に、日中平和友好会の事務局長である金丸さんという人に同行してもらつて直談判したのです。先ほどもお話したようにこの方たちは中国の革命戦争を戦い、中国側に尽くした人ですから、信用が厚くて、中国側は何とかしましようということになつたのです。中国人は信義が厚いので、一度約束すると口約束を必ず守ります。そして行けたのが、一九八七年。冬の約一ヶ月間、国境を歩いてきました。

行くにあたつて訪問目的を全部出しなさいと言われました。私はまず明治開国と同時に海を渡った「北方からゆきさん」のことを考えました。それからシベリア出兵に連行されて、置き去りにされた売春婦たち。「韓国併合」後に北上していく朝鮮の人たち。それにこの国境は最後の最後まで抗日戦が繰り広げられた所でもあります。抗日軍を

追い詰めた日本のスペイ作戦やアヘン作戦についても調べたい。また国境の慰安婦を調べたい。少数民族の村に残された日本女性を訪問したい、と外事弁公室に話しました。一見、欲張つているようですが、五千年の歴史の中のほんの一部です、これは。でも私のできる精一杯のことでした。

「北方からゆきさん」については、生きていれば百歳以上です。直に会つて話を聞くことができませんから、資料に頼るしかないという切なさだった訳ですけど、その末裔は天草とか島原にいらつしやるんですね、隠してますけど。何故その地域から女たちが出たかというと、森崎和江さんの『からゆきさん』にも出てきますけど、幕末の日本は検査がなかつたから、長崎に寄港したロシア兵たちは出島とか有名な丸山遊廓を拒否した。それでロシア兵用に搔き集められたのが、貧しかつた島原や天草の少女たち。彼女たちは「おろしや女郎衆」と呼ばれました。

今村昌平の映画『女衒』の舞台は主に東南アジアだった。「からゆきさん」というどうしても東南アジアがイメージされてしまふのですけど、数からいうと「北方からゆきさん」の方が多いです。ウラジオストクからハバロフスク、さらに北上してバイカル湖の方にまで売られた。

中には才気煥発で、ロシア軍政官の愛人になつた人も極

少數います。でもほとんどの女たちは偉くなんかなれないで、色香が失せれば捨てられて、現地の土になりました。

当時、日本はロシアの情報をつかむために、志士と呼ばれる軍事探偵を送り込んでいました。この人たちは日本語が通じるし、お金も持っていますから、からゆきさんたちは随分彼らに情報を提供したそうです。この情報は日露戦争にかなり役立つたと言われていて、後に『対支回顧録』の中で表彰されています。これも私はおかしいと思うんです。本当は現地民と仲良くし、現地の人からも素晴らしいと言われるような人が表彰されるべきなのに、そんな人は全く登場しないで、戦争に協力した人ばかりが出てくるなんて、いかに戦争を目的とした国家側の『回顧録』であるか、ですね。

シベリア出兵の後、日本は呼瑪^{フマ}という所の金山を狙いました。そこにも女たちが慰安婦として連れていかれてるんですけど、そのお墓が、一九四〇年代に三十七基残つていたそうです。でもそこには私、行けませんでした。冬ですよ、凍りついていまして、許可が下りなかつたのです。よく南方に無縁仏のお墓があると聞きますが、北方にもある

お墓と言えば思い出しますが、「女郎屋をすることこそ、日本發展のためだ」と言つた代表が二葉亭四迷です。女性が海外に進出すれば、女を買いに来た人たちがちり紙とか鑑節とかの日本製品を広めてくれる、という発想なんですね。肉体を通して国際交流が進む、という人は今でもまだ結構いるんです、そういうことを言う男の人は。ただ一夜寝たら、国際交流になるんですか、しかもお金で買って。一方は卑しめられる訳でしょ。まあ、そう言つた二葉亭四迷は結核を病んで、日本に帰る船中で死に、シンガポールにお墓が建つています。からゆきさんのそばに眠れて、さぞ幸せだったでしょうね。

さて話を戻しますが、日露戦争の時、上流階級の婦人たちが中心となつて、愛國婦人会というのができます。この人たちは、売春婦に黒紋付の羽織りを買わせて、そのお金を軍に送る為に、シンガポールの方にまで行ってるんです。普段は決して売春婦とは会わない人たちなのにね。そうやつて女たちは戦争に協力していくのです。

十五年戦争中は朝鮮の少女たちも隨分と連れていかれました。着物や花かんざしをつけられて、「よしこ」とか「かづ」^{カヅ}とかの名前で、日本人相手の慰安婦にさせられ、連

そうです。

行されたまま故郷に帰れずに死んでしまった女性がほとんどです。

満州というと、まず壳春の歴史とつながっているという哀しい感じがあつて、私はいやなんです。そうやつて女の身体を基に進出したんです、開拓団以前に日本人は。

うねり始めた女たち——大河流れゆく

謀略で始まつた九・一八、そして占領に堪えきれず、やがて抗日軍が生まれる頃、日本では『討匪行』という唄が流行りましてね、これに火烽はある山の家、という文句が出てくるんです。この「山の家」というのは、土地を奪われた農民たちが逃げ込んだ山寨のことです。それを日本の軍警が攻撃して、火をつけて、やつつけたぞという意味なんです。

私は「山の家」にいた抗日軍、とくに女性のことを知りたいと思っていました。ハルピンの「少数民族事務委員会」を訪ね、そこで赫哲ホーチョウやオロチョンの人たちの話を聞いて、さあ帰ろうという時に、最初に受け付けてくれた女の人が

『黒竜江省少数民族画集』という本をくれたのです。そこにすごい達筆で「李敏」と書いてあつたので、私、びっくりして。ただの事務員かと思っていたら、この人が元の黒竜江省長の陳雷チエンレイさんの妻、李敏さんだったのです。抗日連軍の女性閩士であり、少数民族の名譽首席という、偉い人です。それで私、インタビューを申し込みまして、話をしてもらつたのです。非常に率直に、いいことも悪いことも皆話してくれました。

日本の特務警察たつた人も話してくれたのですが、まづ日本軍が農民たちを追い詰めて、追い詰めて、最後にあらかじめ決めておいた土地に囲い込んだ話を聞きました。これは抗日軍と普通の農民を分離する政策で、その土地の周りには深い濠があつて、四すみに警察官が見張つているんです。ですからゲリラ部隊は入り込めませんし、出ることもできません。

抗日軍は逃げるしかなくて、靴の中に隠してあつた乾し草を食べたり、脂のにじむ革ベルトを噛みしめたりして生き抜いていたのですけど、最後は追わされて、追われて、三十五万人の隊員が一千人になるまで殺されたのです。

捕らえられて帰順した軍長は満州国側の幹部にまつり上

げられました。抗日軍として根性が座っているとか、日本側にとつて有能でないと日本側が判断した人々は、七三一、つまり石井細菌部隊に送り込まれました。実験に使われ、そして殺されたのです。帰順すれば許されると思って、白旗揚げた訳でしょ。なのに細菌牢に入れられちやつたのです。

本当はこれ、言いたくない」とですが……女性たちは性病菌の実験に使われました。梅毒菌や第四性病菌を植え付けられて、人体実験の結果を見る。しかも同時に凍傷の実験までしているんです。森村誠一の『悪魔の飽食』なんかにもいっぱい出てきますけど、真冬に木に縛りつけて、どのくらいの温度で、どこが凍傷になつて、どこが残るのか……最後の最後まで、息の根が止まるまで実験に使つて……なぶり殺しです。その上、生体解剖も広範囲にわたくつて行なわれていたそうです。よくしやべつてくれるんです、やつた人たちが。私も女ですから、細菌を植え付けられる自分とか、娘が犯されて縛りつけられて、とか思うと狂っちゃいそうになるんです。聞くのがつらくて、つらくて……本当に性にまつわる話は言うのもつらい、聞くのもつらいです。

抗日軍の女性たちはそういう極限状態の中での、生理がな

くなつていったそうです。日本の女性も、最初は支配者の側にいたのですけど、やがて一転して、逃げる側になると強姦されたり、生理が無くなつたり、同じ道をたどるんです。つまり満州の歴史が物語るように、戦争というのはどちらに転んでも、重層的に民衆が傷つけあう訳です。

李敏さんは「若い女性には、二度とあんな思いをさせたくない」と言いました。私の「自分史講座」の生徒さんである日本の女性も同じことを言いました。これは未来を考える時、女たちが戦争を止める一つのきっかけになると思いませんか。それこそ大河が流れるように、世界中の女が手をつないで立ち上がつたら、世界史は変わっていくと思います。

今、反原発の動きも含めて、各地で女たちがうねり始めています。そして私たちは今、正しい事実をしらべることも、聞き書きをすることもできます。字も覚えられず、無知にされて加害者側に置かれた女たちとは違います。今、私たちが無知であることは犯罪だと思いますし、加害者になり得るきっかけだと思うんです。少しでも希望が残されていれば皆で分け合つて、いい波動を感じ合えるような、いい聞き書きを是非一人一人にして欲しいと思います。

(文責 矢ノ口美穂)

つむぐ合本（1号～5号）

238P ¥1200

目次より

砂川・女の暮らし

砂川の養蚕・そのうつりかわり

聞き書き・養蚕農家に嫁いで

• 機を織る暮らしの中で

砂川の織物とその周辺

聞き書き・機屋の織子となって

• 水車屋三代

寄稿・砂川太織の歴史についての推論

立川飛行場と女たち

立川飛行場

聞き書き・旅館・下宿屋の三十年

• 商店を守って

• 幼児と共に二十年

• 商家のあととり娘に生れて

砂川闘争と地域の女たち

聞き書き・百姓が土地手離したらおしめえだ

• やさしい人でした

• 心に杭は打たれない

基地と教育その1・砂川で私は大きく変りました

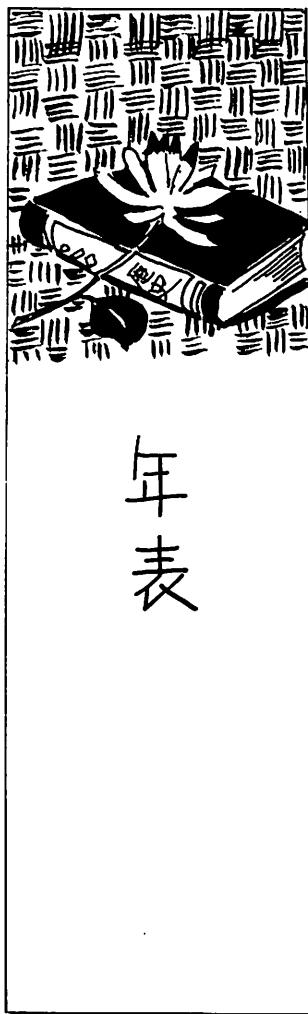
その2・子どもたちと砂川闘争

講演と交流の集い

いま地域女性史をやることの意味

— 加納実紀代 —

他



西歴	西歴	西歴
年号	年号	年号
一六五四 一八九四	承応三 三一	玉川兄弟の努力により玉川上水が開通。
一六五七 一八九八	明暦三 三二	砂川分水できる。
一八六〇 一八九九	安政七 三三	常陸の国の蚕影神社、阿豆佐味天神境内に分社される。
一八六八 一九〇一	明治元 三四	柴崎村、砂川村、韭山県に管轄される。砂川村と称す。
一八七〇 一九〇二	明治三 三五	この頃より中野篠縄始まり、わが國屈指の特産物となる。
一八七一 一九〇四	普濟寺において郷学校開設。	玉川上水に水運業始まる。
一八七二 一九〇六	玉川（立川）	柴崎村、砂川村、神奈川県に編入。衛生上の理由で玉川上水に水運業廃止される。
一八七三 一九〇七	五	砂川村に桑豚業始まる。
一八七八 一九一〇	四	柴崎学校前身麹穎堂舎を開設。
一八八〇 一九一四	十一	立川分水利用により糸始める（三年位で廃止する）
一八八一 一九一五	十四	柴崎学校新築す。郡制度施行。
一八八四 一九一七	十七	精葉会社（製茶）創立。
一八八九 一九三二	二三	桑の品種改良に着手。砂川村に裏田用水利用の共同製糸始まる。
一八九一 一九三三	二四	柴崎村を立川村と改め、柴崎学校を立川学校と改称。
一八九三 一九三三	二五	機械製糸工場の創立。
一八九三 一九三三	二六	柴崎村以西拝島村まで十ヶ村を併合村役場を中神におく。
一八九三 一九三三	二七	立川村独立する。甲武鉄道立川駅（新宿—立川間）により立川停車場できる。砂川の仲介運搬業姿を消す。
一八九三 一九三三	二八	暴風雨により多摩川堤防決壊。農作物被害を受ける。
一八九三 一九三三	二九	大日本農会北多摩支会主催第一回繭品評会開催。
一八九三 一九三三	三〇	西・南・北部の三多摩を神奈川県より東京府に移す。

西歴	西歴	西歴
年号	年号	年号
一八九四 一九三五	二七 三七	青梅鉄道開通（石灰石運搬用）
一八九八 一九三五	三一 三五	普濟寺心源庵に蚕種検査所を設く。
一八九九 一九三五	三四 三五	砂川村の開田最高潮。多摩農業銀行立川支店開設。
一九〇一 一九三五	三四 三五	東京府立第一中学校開校。
一九〇二 一九三五	三四 三五	立川郵便局が三等火配局として開局。
一九〇四 一九三五	三七 三七	日露戦争おこる。
一九〇六 一九三五	三四 三五	岡部製糸場創立（砂川村）。東京府蚕病予防事務所を立川村に設く。
一九〇七 一九三五	三九 三九	甲武鉄道国有となり中央線と改称。砂川裏田用水廃止、砂川源五エ門水道できる。
一九一〇 一九三五	四〇 四〇	日韓併合条約調印。
一九一四 一九三五	四一 四一	砂川の製糸業閉鎖。糸綿仲介業大半廃業する。尾崎製糸場創立。
一九一四 一九三五	四二 四二	第一次世界大戦おこる。
一九一四 一九三五	四三 四三	東京蚕業試験場、立川村に設置される。合名会社立川食品市場設立。
一九一七 一九三五	四四 四四	桑苗生産量、驚異的の発展とげる。（1000万本）
一九一七 一九三五	四五 四五	立川村に陸軍航空第五大隊が設置される。
一九一七 一九三五	四五 四五	関東大震災。
一九一七 一九三五	四五 四五	立川村単独にて町制を施行。
一九一七 一九三五	四五 四五	青梅鉄道電車運転を開始。
一九一七 一九三五	四五 四五	東京府農事試験場、豊多摩郡中野から立川に移転。
一九一七 一九三五	四五 四五	日野橋が加設される。

一九一七

昭和二

金融恐慌はじまる。

一九一八

三

陸軍航空本部技術部、立川に設置。

一九一九

四

立川に日本初の民間定期航空が開かれた。立川第一小学校開校。

一九二〇

五

石川島飛行機製作所（のちの立飛）が開設される。

一九二一

六

滿州事変おこる。

一九二二

七

この年立川より民間飛行場は羽田へ移転し羽田飛行場が東京国際空港として使用される。

一九二三

八

府立繩検定所が立川町に開設。

一九二四

九

支那事変おこる。

一九二五

十

立川郵便局（等局に昇格）。

一九二六

十一

立川第三小学校開校。

一九二七

十二

立川町市制を施行。横田基地が立川飛行場の付属施設、多摩陸軍飛行場として設置される。立川第四小学校開校。

一九二八

十三

大東亜戦争おこる。

一九二九

十四

戦時体制諸施設強化。南武・青梅・五日市の三私鉄道日本国有鉄道に買収される。

一九三〇

十五

立川空襲、山中坂悲話。

一九三一

十六

第一次世界大戦終る。

一九三二

十七

米空立川基地に進駐、空軍基地となる。横田基地も米

一九三三

十八

軍に接收され米軍横田飛行場と命名される。

一九三四

十九

立川市公民館建設。

一九三五

二十

立川市日米地方連絡協議会設立。

一九三六

二一

立川市電開通。

一九三七

二二

砂川村町制を施行。緑川改修工事完了。立川市自動

一九三八

二三

汚染井戸数二六五基。

一九三九

二四

立川市日米地方連絡協議会設立。

一九五二

二五

対日講和条約調印。

一九五四

二六

安保条約に基づき立川基地を在日米軍に提供。井戸水のガソリン汚染事件発生。被害人口二六七七人。

一九五三

二七

立川市日米地方連絡協議会設立。

一九五四

二八

砂川村町制を施行。緑川改修工事完了。立川市自動

一九五五

二九

式電話開通。

一九五六

二九

立川市日米地方連絡協議会設立。

一九五七

二九

東京調達局が立川基地拡張計画を発表。

一九五八

二九

地元農民が基地拡張反対期成同盟を結成。以後砂川闘争となる。

一九五九

二九

砂川町議会、拡張反対を決議。反対闘争委員会を結成。

一九六〇

二九

条件派結集の動き。砂川町基地問題臨時処理懇談会が結成。

一九六一

二九

調達庁、機動隊を導入して測量調査強行。反対共闘会議と衝突。負傷者続出。

一九六二

二九

砂川町議会で八議員が条件闘争を主張。反対九、保留二で否決。「晩の議会」と呼ばれる。

一九六三

二九

基地拡張に対する闘争決定。

一九六四

二九

調達庁、都收用委員会に收用裁決の申請を行なう。

一九六五

二九

強制測量

一九六六

二九

調達庁測量強行。機動隊とピケ隊衝突。約一九〇〇坪測量。

一九六七

二九

反対同盟、各地の集会へ闘争報告に出る。

西歴年	昭和年号	事件
一九五六 一九六八	昭和三二 二・一八	黒人、夜の女、不良を中心とした麻薬患者急増。
一九六五	二・二七	立川市の教育実態調査実施（第四小学校区）
昭和四〇	三・一	条件派、調達厅との間で協力謝礼金と、家屋移転の日をきめる。
一九六八 四三	四・二五	移転した条件派の空家屋取壊しはじまる。
二・一九	四・二七	日米連絡協議会で井戸水汚染、風紀問題を討議する。
一九六八 四三	五・一	反対同盟の婦人たちメーデー参加。メーデーの先頭に立つ。
一九六八 四三	六・十九	調達局、都収用委員会に収用裁沢の申請を行なう。
一九六八 四三	七・十六	砂川町長、土地収用裁沢の公告を拒否。
一九六八 四三	九・十三	調達局は九月十日の鳩山首相の土地収用認定に基づいて十月一日から十月十六日までの測量立入調査をする旨通告。
一九六八 四三	十・三	砂川町暴力反対総決起大会が阿豆佐味天神で開かれる。
一九六八 四三	十・十二	調達局が測量強行。ピケ隊と機動隊が衝突、負傷者一六四人を出す。
一九六八 四三	十・十三	流血の惨事。ピケ隊と機動隊が衝突。負傷者一、一〇〇人。
一九六八 四三	十・十四	防衛廳長官、測量中止を発表。
一九六八 四三	この年より一九七三年（昭和四八年）までの間に、横田基地南側の住民約五七〇世帯の集團移転が行われる。	

西歴年	年号	事件
一九六八	十一・一	米軍立川基地の飛行業務を停止し、組織活動を横田基地、米本国に移動する旨発表。
一九六八 四四	十一・三	立川基地から横田基地への米機移駐完了。

おわりに

たことにもなりました。出会いはまた新たな出会いを生む、ということでしょうか。

六月発行予定の七号が難産の末、一ヶ月遅れて発行の運びとなりました。内容はともかく、悪戦苦闘の結果だけはそれぞれの文章の随所、随所に散りばめられているように思えます。

話を聞き、資料を集め、つきあわせて書くということがいかに“しんどい”ことかと、あらためて実感しているところです。

話していく方のプライバシーをどう守るのか、語れないことの中にある真実をどう読み取るのか……と今号

のテーマからもまた重い課題が投げかけられました。

埋もれている歴史を掘り起こし、女の側から歴史を検証し直していく、そんな仲間が全国にたくさんいること、そんな仲間が過去の歴史を共有するばかりでなく、これから歴史と共に作っていくとする、女の側からの提起に未来への希望を強く感じました。

女性史（女の歴史）を編むということが単に女の本を作るということではなく、その過程において、社会や歴史を見る目を肥やし、力をつけて共に歩むことなのだということとも。

そんな中で昨年十一月、『今、「満州」が問いかけてくるもの』のテーマで、作家の林郁氏に講演していただき、女の側から近・現代史を見直すことの大切さを学びました。

そればかりでなく講演会に参加していた若い女性（二十三歳）が聞き書きの会のメンバーに加わることになり、講演会は意欲に燃えた女性を会に迎えるきっかけを作ってくれ

歩としたいと念じつつ……。

吉澤

つむぐ7号 定価 750円

発行月日 1989. 7. 7

発行者 立川・女の暮らし書きの会

